

路上日記



clark0226

路上日記

あるギター弾きの過去の日記、及び追想録

これは以前、某ミュージシャンサイトに掲載していたコラムの一部です。（他にはインディーズ・バンドやデビューを控えた若手ミュージシャンが紹介されている中で、僕だけが少々浮いた存在でした）

当時はまだブログという言葉が一般的ではなかったので、体裁はWEB日記という形をとっています。

（日記とはいえ、半分は回想からなっています）

+

僕がなんでこの記事を書いていたかというと、

- ・ 無名の路上ミュージシャンの記事をコンテンツにしようという心意気に打たれた。
- ・ 自分でも日々の出来事を記録しておきたかった。
- ・ 文章でも何かを表現出来るようになりたいという意気込みがあった。

という、三点からです。

駄文ながら、これから路上演奏を行おうとする人の参考になれば幸いです。

はじまりはじまり

僕が路上演奏する時には大抵、相棒が1人一緒だ。

彼、F氏は歌を歌わせても味のある器用な男だけど、僕と一緒に時は主として伴奏を担当してくれる。

路上演奏というと、フォークの弾き語り（当時はこれが多かった）がまず思い浮かぶだろうけど、僕らの演奏は片方が伴奏を弾いて、片方がギターでメロディを弾くというスタイル。

曲目はジャズや、ジプシー・スウィングと呼ばれる「ジャンゴ・ラインハルト」の音楽、そしてボサノヴァやポップスをを少々、隠し味に民族音楽を一つまみ、そして即興演奏など。

1人でやる時にも歌は唄わず、ギター一本（おもにナイロン弦を張ったクラシック・ギター）で、メロディと伴奏をひたすら弾き続ける。曲目は、お馴染みの古い映画音楽やミュージカル、ジャズスタンダードの曲、そして即興演奏だ。

（のちに路上演奏仲間から、それをストロング・スタイルと呼ぶ事を知った。胡弓やサクソ吹きなど、伴奏のテープをかけながら演奏する人も割と多い）

ちょっとした変化を付ける為、クラシック・ギターとスティール・ギターの二本を抱えて路上に行く事も少なくない。

それでも、僕のギターは軽かったし、スピーカーやバッテリーを携えた路上演奏家よりはよほど軽装だ。

それから、ギターの他に大事なアイテムといえば、軽量の折りたたみ椅子だ。

（はじめは百円ショップにもある小さな四角い椅子がギターケースにすっぽりハマって愛用していたけど、今はより軽量なアルミ製の三脚タイプをみつけた）

夜のアスファルトはかなり冷えるし、クラシックギターは立って弾く事が出来ない。

それに椅子に座れば、足でステップを踏むことが出来る。

ステップは雑踏の中でリズムを合わせる為にも、欠かせない要素の一つだ。

あとは小道具としてポケットに、ハーモニカやカズー、コード譜を書いたメモ帳など。

路上には自分のバンドの宣伝や練習の為に演奏しているストリート・ミュージシャンがほとんどだけれど、中にはそれを本業として生計を立てている演奏家も沢山いる。

鼓弓一本で家族を養っている中国人、路上で稼いだ金だけで旅を続けているという太鼓叩き、ホームレスのブルーズマン...

僕らはちょうど、そんな彼らの中間にいる存在だった。

演奏しなくても食ってはいけるけど、贅沢は出来ない。

路上で受け取るチップが少しは（場合によっては驚くほどに大きく）生活の足しになっている。

路上で「稼げる時間帯」は限られてるから、それを本業にするなんて考えられないけど、聴衆のチップを「全くアテにしていけないわけじゃない」という点で、いわゆるストリート・ミュージシャンとも違っていったのだ。

(友人のシンガーソングライターは、毎年、年末になると故郷に帰る電車代を路上演奏で稼ぐことにしていた。寒くなると練習がてらのストリート・ミュージシャンは減るけど、飲み会の多いこの時期は最も稼ぎやすい期間だからだ)

+

僕らは大抵二人で演奏していて（色んなゲストが参加する事も多かったけど）、一人で演奏することは少なかった。

けれども印象的な出来事は、一人で演奏している時に起こることが多かった。

ライムライト

ローカル線の駅前で演奏していた頃、とあるクラブ（DJのいる方ではなく、お酒を飲む方の）の路地を挟んだ斜め向かいが僕らの指定席だった。（他の、居酒屋だとかカラオケだとかの向かい
は店内の音響がうるさくて、演奏に向かないのだ）

さて、そんな店の前で演奏しているといつも面白いシーンを見る事が出来た。

入る時は真面目な鬨う男の顔をしていたサラリーマンが、一、二時間たつとベロベロに酔っ払って出てくるのだ。

その変化が激しいほど、なんだか面白い気分になって横にいるF氏と互いに目配せしてニヤリとしていた。

そして、ちょっと気になってしまう事があった。

お客さんが帰る時には、お見送りとして一人か二人のホステスさん（というのだろうか？）が店の外に出てくる。

そして彼女達は、お客さんを見送った後、ドアの前でしばらく立ち止まって僕らの演奏を聴いていくのだ。

勿論、すぐに店内に戻らなくてはならないのだから、時間にしたらごく僅かな間だ。

けれども毎回、拍手をするわけでも微笑むわけでもなく、ただ黙って僕らの演奏を聴いていく。

+

その日、僕はなんだか帰りたい気分にならなくて、F氏と別れた後も、いつもより遅くまで一人でギターを弾いていた。

終電が過ぎると人並みは絶え、やがて目の前のクラブの電灯も消えた。

そうしてしばらくすると、ホステスさんの一団が店から出てきた。

仕事帰りの彼女達は、ジーンズとかの普段着だった。

数人が僕の事を見つけ、近寄ってきて僕の周りに座り込んだ。

何か弾いてくれというので、そのクラブの名にちなんだ古い映画音楽を弾いたんだけど、多分だれも気付かなかったんじゃないかな。

1人が自販機から飲み物を買って来て一本を僕のそばに置き、彼女達もそれを飲みながら仕事終わりのおしゃべりを始めた。

僕は黙って演奏を続けていたけど、そのうちの隣に座った一人が僕の顔を覗き込むようにしていた。

「きみ、私の昔の彼氏に似てるわ」

すると、別の女性が言った。

「私も、キミが田舎の弟に似てると思って見てたのよ。でも、もう何年も会ってないのよね」

二人とも何かを思い出したような表情で僕を見ってくる。

水商売の女の人には苦手だけど、こういう素の表情には弱いんだよなあ。

すると、店からだいぶ年配の女性があらわれた。

ママさんとかそういう立場の人なのだろう。

彼女が、ホステスさん達に、明日も早いから早く帰りなさい的なことを話しかけ、その場はお開きになった。

ホステスさんたちがいなくなってからも、年配のママさんは何か物思いにふける様に立ち止まり、しばらく僕の演奏を聴いていた。

それから言った。

「あんた、別れてきたクニの息子にそっくりだわ」

Heartstrings

ジプシー・スタイルのジャズ（特に短調の曲）を弾いていると、意外な事に年配の方々が立ち止まって耳を傾けてくださる。

といっても、ジャズに興味があるわけではない。ジプシー・スタイルに特有の、哀愁を帯びた演歌や民謡の様な味わいが、心の琴線に触れるのだろう。

疲れたサラリーマンの方々も同様に、彼らの心に短調の愁いを帯びた音色は「ハマる」らしい。

僕も同じ日本人だから、そこら辺の感覚は分かるつもりだ。

そこで、そういうお客さんがいる時には、ことさら哀愁を強調して弾いてみたりする。

でも、ずっと暗い演奏を続けるわけじゃない。

落ち込んでいる人に、無理矢理明るい曲を聴かせても反応が無い事がある。

でも、彼らの心理状態と良く合った音楽を奏できれば心を結びつける事が出来る。

そして、徐々に演奏を明るい方向にシフトすると、面白いほどに彼らの表情も明るい方向へ変化してくれるのだ。

（音楽療法に関する勉強で知ったのだが、これを「同質の原理」と呼ぶらしい）

+

そんなこんなで、今日もお客さんの大半は年配のサラリーマンやお年寄りだった。

魂を込めて演奏したつもりだが、僕のギターはジプシー・ギターではなく、すっかり演歌ギターになってしまった。

Rue Paradis

誰でも、自分の人生において主役を演じているというけれど、路上ではまさにその様々な主役たちを見る事が出来る。

疲れたサラリーマン、飲み会帰りの若者、恋人たち、、、。

一見、周囲の視線を集める側である僕たち路上演奏家だけど、路上において実は一番の傍観者だ。

なぜなら、路上は人々にとってどこかに移動するという目的を持ってただ通り過ぎるだけの存在にすぎないけれど、僕たちはそこを通る全ての人々を対象として音楽を奏でているのだから。

僕たち路上演奏家の仕事は、(格好良くいえば)彼らの人生を引き立てる都合の良い脇役になることだ。

(その点が、弾き語りや路上ライブを行うアーティストたちとの違いだと思う。彼らは自分たちが路上の主役であろうとするし、お客さんも主役である彼らを見に来るのだから)

+

さて、今日も一組のカップルがお客さんとして立ち止まってくれた。

カップルといっても、女性の方は水商売のようにも見える。

男性は、彼女よりもだいぶ年上で、眉間にシワをよせた不機嫌なサラリーマンだ。

先に立ち止まったのは、女性の方だった。

「ねえ、ちょっと聞いていきましょうよ」

男性は、それを拒否した。

男としてその後の段取りなど考えていたなら、こんな所で立ち止まるのは嫌に違いない。

けれど彼女の方は、いかに男を振りまわすことが出来るかで自分の価値を計っているようなタイプ。

やがて、男の方が根負けして、二人仲良く僕の前に立ち止まった。

「ねえ、もっと静かな曲を弾いてよ」

女性が今弾いている曲を中断させ、強引に別の曲を要求してくる。

僕は、彼の方にちょっとだけ(ほんのちょっとだけ)同情した。

「あの曲は弾けるかい？ほらあの、スペインの...」

男性が言った。

彼は彼女の前で、音楽に詳しいところを見せつけたいのかもしれない。

でも、哀れなほどに彼の記憶はあやふやだった。

「弾けますよ。この曲ですよね」

僕はそう言って、勝手に自分の得意な曲を弾き始める。

「そうそう」

男性は満足した様子で微笑んでいる。

こんな時、張り切りすぎるのは禁物だ。

こんな時、上手くいけば男性は格好つけて大枚のチップを弾んでくれる。

けど、下手をして女性の方がこちらに興味を示しすぎれば、男性は機嫌を損ねかねない。

まあそこら辺の心理は、僕も男だから良く分かる。

+

だけど、僕は誤解していた。

一曲弾き終わると、それならあの曲も弾いてくれと、男性の方が興味津々で身を乗り出してきたからだ。

どうやら彼女に音楽に詳しい所を見せようとした、というのは僕の間違いで、昔は随分とギターに入れ込んでいたけど今はサッパリ、という手合いの中年男性らしい。それが、路上では珍しいクラシック・ギターの演奏を聴いてスイッチが入ってしまったのだ。

僕はリクエストに応じられる範囲で、短く数曲を演奏した。

だが、僕は内心困っていた。

今度は、彼女の方が明らかにこの状況に飽きていて、早く立ち去りたがっているのがありありと顔に出ていたからだ。

「もう行きましょうよ！」

彼女が苛立たしげにそう言って行って立ち去ると、男性は最初の不機嫌な顔に戻って（でも、そこに叱られた犬みたいな哀れな表情も少し混じって）、渋々と彼女の後に従った。

去り際に彼が振り返った。

僕は、ガラにもなく

「良い夜を！」

と言った。

マリオ

同じローカル線の話。

駅の構内で演奏していると、毎日、同じ時間に決まってあらわれるおじさんがいた。

(一人の時は駅前ではなく、駅構内のコンコースで演奏する事が多かったのだ)

彼は小柄で、人懐っこそうな顔で、地味だけど趣味のいい服を着ていた。

少しシャイな感じの、どこにでもいそうなおじさんだけど、マリオの様な口髭を生やしているのが特徴だった。

彼はいつも、通路を挟んで反対側の、柱の陰になった目立たないところから僕の演奏を聴いていた。

一見誰かと待ち合わせでもでもしているかのようにも見えるのだけど、彼はそこでいつも三、四曲聴いて立ち去って行った。

興味を持って話しかけてくれても一曲聞いて去ってしまう人が多い中で、彼のようなお客さんは励みになる。

孤独な路上音楽家にとっては、どんな饒舌な称賛や万来の拍手よりも、そんなささやかな接触の方が案外心の支えになるものなんだ。

駅で演奏していると、目の前にいろんな人が立ち止まったり座り込んだりするが、彼は決して近寄って話しかけてきたりしなかった。

気になって彼の方を向くと、彼はいつもニッコリと微笑む。

男同士で微笑みあうなんてゾツとしないけど、彼の素朴な笑顔を見ると、僕もつい微笑みを返してしまう。

そして、話した事もない彼の人柄の温かさを感じつつも、ちょっとした居心地の悪さも感じてしまうのだ。

一曲弾き終えて、目の前のお客さんが僕に話しかけてきても、彼は遠くから様子を見ているだけ。

そして、お客さんとの会話が長引きそうだと察すると、小さく会釈の様な微笑みを残して去っていくのだった。

その日、やっぱり彼は来ていたけど、天気が悪かったせいか、人通りはまばらで、目の前に立ち止まるお客さんはいなかった。

そんなわけで、その日、僕はついに決心した。

今まで、どんなに可愛い女の子が聴いていようと、自分からお客さんに話しかける事なんてなかったのに、初めて僕の方から彼に話かけることにしたのだ。

「あの、いつも、どうもです」

我ながら間の抜けたセリフだと思った。

すると、彼はいつもの素朴な笑顔を浮かべて言った。

「ワタシ、ニホンゴ、ワカリマセーン」

黒い瞳

路上で特に、年配の方の評価が高いのが「黒い瞳」だ。

戦後、歌声喫茶などで流行した事が関係しているのだろう（最近、新宿で歌声喫茶が復活したという話も、お客さんから聞かされた）。

さて、この黒い瞳。

元は18世紀、ロシア地方に住むロマ（ジプシー）によって演奏されていたものが、流行して現在に伝わっているらしい。

当時は、その東洋的な旋律がロシアの人々にエキゾチックに感じられたのだろう。

現在はロシアから東欧、ギリシャに至る広い地域で自国の「民族音楽」として演奏されているグローバルな楽曲。

歌詞は元々ついていたものではないらしく、色々な種類があるのだけど、タイトルの「黒い瞳」とはいうまでもなく、古くはインドからやって来た彼ら、ロマの瞳のこと。

みんな瞳が黒い日本人にとっても、ロマの持つ、あの子供やお年寄りであっても独特の鋭さを持った、不思議な眼の魅力は十分にエキゾチックに感じるものだ。

その不思議な魅力を歌ったこの曲が、様々な労働歌を誇るロシア民謡のレパートリーに交じって日本に流入し、学生運動の階級闘争に興ずる当時の若者たちに愛されたというのは奇妙な話だ。

ロシア語でアチェ・チョル・ヌイヤ、我々ジプシー・ギター業界（そんな業界があるとすれば）ではフランス語でレジュノワール"Les yeux noirs"という事が多い。

(ルイ・アームストロングは「オチャ・チョニア」というタイトルでレコードを吹き込んだけど、ルイはこのタイトルを人名と解釈したのか、「いとしのオチャ・チョニア、ああ素敵なチョニア」といった歌詞だった)

ちなみに英語では"Dark Eyes"と呼ぶそう。

"Black Eyes"では、ゲンコツで殴られた時の、あのマンガみたいな状態を指すのでご注意を。

路上の面々

路上で演奏していると演奏していると、様々な愛すべき人々に出会う。

例えば、

応援してくる人(演奏をかき消すような大声で応援されても、対応に困る)、

宣伝を買って出る人(演奏中に呼び込みをされても...),

手拍子を煽る人(ご自身がされる分には結構だけど、周りにまで煽られたり。そして、拍子の向かないバラード曲だったり)、

司会を買って出る人(派手に煽られても、僕は地味に演奏し続けるだけだったり)、

演奏について、(たとえ演奏の真っ最中でも)延々とアドバイスをしてくる人、

もはや音楽とは関係無く持論の人生訓を長々と展開する人、、、

つまりは「ハタ迷惑」というのがふさわしいのだけど、どこか愛すべき人々。

そして、何故か多いのが自称～という人々。

例えば、

自称色男(他に自称ジゴロ、自称アイドルなど)、

自称大会社の社長(これはオーソドックス)、

自称小説家(類似して、自称エッセイスト、自称詩人、自称天才、自称学者など)、

自称業界関係者(単なる詐欺師から業界関係者の知り合いの知り合いがいるだけの人だったりとか)

、

自称殺人犯(これも意外と多い。時効になるほど昔の話だと付け加えたりとか)、

などなど。

+

で、その日出会ったお爺さんは、自称「ホームレス」だった。

言われなくても彼の風体は如何にもそれらしい。

色褪せたアロハ、伸びっ放しのヒゲ、擦り切れたズボンと雪駄。

お爺さんは僕らの弾いていた「黒い瞳」が気に入ったようで、続きをリクエストし、目の前のアスファルトにどっかりと胡坐をかいて座り込んだ。

通行人がそれを避けて通る。これでは商売はあがったりだ。

本当ならそこで気付くべきだったんだけど、不注意にもそう出来なかった。

何故なら、目の前のお爺さんよりも気になっている事が一つあったからだ。

それは、歩道の反対側、車道を背にして少し離れた所(つまり、僕らの斜め向かい)に立っているダーク・スーツの二人組。

一人は背中で手を組み、もう一人は両手をズボンのポケットに入れた、いかにもそれ風の二人組。

その二人が、さっきから僕らの事を無表情な眼でずっと観察している。

いわゆる「ショバ代を払え」といった面倒に巻き込まれるのは御免なので、それとなく相方に目で合図する。

その内、気が気でなくて演奏もおぼつかなくなる。早々に撤収するべきか。

それとは知らず、「もっと気合を入れて弾け！」と自分勝手なカツを入れてくるお爺さん。

まるで、仙人に虎か何かを突き付けられた弟子にでもなった気分だ。

その時、たまたま通りかかったサラリーマンが、(ひどく酔っ払っていた為に気が付かず)座り込んでいるお爺さんにぶつかって蹴躓いた。

僕らは心配して手を止めたけど、お爺さんは邪魔そうにサラリーマンを払うと僕等に演奏を続けるように促す。

だが、路上にみっともなく倒れ込んでしまったサラリーマンは、逆切れしてお爺さんに掴みかかった。

僕らも反射的に立ち上がる。

だが、僕らよりも早く動き出した人影があった。

それは、遠くからこちらを監視していたダーク・スーツの二人組。

彼らはサラリーマンの襟元を掴んで抱えあげると路傍に張り倒し、本気の力で蹴ったり殴ったり(いわゆるフルボッコ)し始めた。

「もうその辺にしといてやれ」

いつの間にか立ち上がっていたお爺さんが、ダーク・スーツの二人を制止する。

「邪魔したな、兄ちゃん達」

と、お爺さんが言う。

彼が背を向けて立ち去ると、二人組は動かなくなったサラリーマン(それが酔いのせいかな暴力のせいかは分からなかったけど)を後に残して、数歩離れてあとに従った。

去り際、二人は僕らの方を向いて丁寧にお辞儀をし、一人がギター・ケースにチップを入れた。

警察官が来たのを確認して、サラリーマンの処置は彼らに任せる事とし、僕らも早々にその場を立ち去った。

+

実をいうとそのお爺さんについて、僕らは演奏中にその名前を聞かされていた。

「この街で何か厄介に巻き込まれたら、俺の名前を使うといい」という言葉とともに。勿論、その時はこれも「自称～」の類だろうと思って気にも留めていなかった。

で、後日、同じ様に話しかけてきたホームレス(こちらは正真正銘のホームレス)のおじさんとの会話で、彼が正真正銘のその筋の顔だったと知った(勿論、その名前はここには書けない)。

ついで、その名前を「使う」という機会にはならず済んだけど。

Tips for Tip

チップをいかにして受け取るか？

これは、路上演奏家にとって大問題だ。

僕らも最初は恥ずかしがって何も用意していなかったけど、チップを渡しにくるお客さんがいると、その度に演奏を中断しなければならない。その上、中には、チップを渡すためだけに演奏が終わるのを待ってくれるお客さんもいる。

それでは、という事でギターケースを開いておくようになったのがそもそもの始まりだ（通行を妨げないように、正面ではなく斜め横に置く）。

やがて僕らは、見せ金を置くという事も覚えた。

何も入っていないギターケースに最初のチップを入れるのは躊躇するものだし、そこにお金を入れていいものなのか迷う人も多い。

そこで、あらかじめ少額の小額をケースの中に入れておくのである。

（二人で演奏している時は、この小銭の為に稼ぎの分配が曖昧になる事が良くあった）

それから、ケースの中に替えの弦やハーモニカといった「小物」を入れておくといふ事も、後から知った。

たまに、有り難いお客さんがお札を入れてくれる時、風で飛ばないようにと「おもし」に使ってくれるのだ。

（高額紙幣は、一曲終わるごとにポケットに回収するのは言うまでもない）

（あるアメリカ人のミュージシャンは集金用の段ボール箱のふちにマジックで"FOR THE MUSIC"（音楽の為に）と書いていた。そして、お金を入れようと箱の底を覗き込むと、"THANK YOU"の文字。やるぜ）

さて、そんな感じでギターケースを開けておくと、お金以外にも色々なものが入ってくる事がある。

居酒屋やカラオケの割引券、他のミュージシャンのフライヤー、ゲームセンターのメダル（なぜ？）、ライブのチケット（チケットだけでは場所が分からず行けなかった）、パスネットやバス回数券（これは助かる）、謎の電話番号が書かれた紙（怖くてかけられない）、自販機の飲み物やコンビニのおにぎり（有り難く頂きます）....。

けど、その中で一番嬉しいのは、（ちょっとクサイけど）立ち去る時や何かを入れてくれる時の、お客さんの励ましや感謝の言葉、そして笑顔だったりする。

隣にいるF氏は演奏中は楽器に集中しているから、一曲終わった後にギターケースに入った金額を見ておどろく事も少なくない。

でも、僕が路上では極力前を向いて演奏するようになったのは、そんな彼らの笑顔を見逃したくないからなんだ。

トンネルのギタリストたち

その日はF氏と二人で、高架下のトンネルで演奏していた。

音もうるさくて人通りも少ないのだけど、他の演奏スポットが全部、大音量のストリート・ミュージシャン達に占められていたのだ。

すると、ギターケースを抱えた僕らと同年代と思われる青年が立ち止まった。

彼は律儀に僕らが一曲演奏し終えるのを待ってから話しかけてきた。

「探しましたよ、ここにいたんですね」

突然のセリフに、僕とF氏は顔を見合わせた。

記憶を辿るが、彼とは初対面だ。

話を聞くと、彼は普段渋谷の路上で演奏しているが、同じ路上演奏仲間からの情報で面白い二人組がいると聞いてやってきたそうだ。いつの間に、そんな有名になってしまったのだろうか？ひとしきり話し終えた所で、彼はもう一曲なんかやって下さいよ、と言った。

だが、僕は嫌な予感がしていた。

前にも、この町で路上演奏しているインストの二人組がいたという話を聞いたことがあった。彼はひょっとしたら他の誰かと僕らを勘違いしているのではないだろうか？それに僕らは、いわゆる「定期ライブ」をしているわけではないのだ。そして、なにより、そこまで人を惹きつける演奏をしているとはとても思えない！

だが彼は、僕らの演奏を満足げに頷きながら聴いていた。

二曲目を終え、彼は「今のもジャンゴの曲ですか？」と聞いてきた。

「適当に弾いてるから一応、オリジナルって事になるかな」と答えた。

ジャンゴという名前が出て僕は少し安心した。どうやら人違いではないらしい。

しかも、話を聞くと、彼は僕らを探して二回もこの町を歩き回ったそうだ。

僕は彼にも、「ギターを持ってるなら何か聞かせてくれ」と言った。

そして、再び疑問が湧き上がった。

彼が始めたのは、何の変哲もない（失礼！）、いや、なかなか味わい深いのだけど、いわゆるストリートに良くある弾き語りのフォークソングだったからだ。そんな彼が、なぜ僕らを探しまわっていたというのだ？

彼は一節歌ってやめようとしたけど、目配せして続けるように促し、アドリブで合いの手を弾いた。

F氏もコードを重ねたり、ギターを叩いてパーカッションを入れ始める。

世にも幸せなセッションはしばらく続き、彼は興奮した様子で帰って行った。

+

こんな事があると、同じ場所で同じ曜日に定期的に演奏する事の大切さを思い知らされる。弾き語りの彼らの多くはそうしている。

だが、僕もF氏も極度の気分屋なので、今後も「定期ライブ」をする事はないと思う。

(それを出来るほどの勤勉さがあつたら、もっと別の事をしているはずだ)

「探していた」といわれると、ちょっと気が咎めるけど。

When The World Was Young

しがない路上演奏家の自分にもちょっとした夢がある。大舞台に立ちたいとか有名になりたいといった華やかなものではなく、けれどもそれと同じくらい素敵な、ちょっとした夢なんだ。それは、路上で演奏しているとしばしば立ち止まって耳を傾けてくれる恋人たち。まだ手を繋ぐのも恥ずかがっている若いカップルもいれば、長年付き添った老夫婦もいて様々だけれど、そんな彼らの愛を盛り上げるのに僕らの音楽がささやかなりともお役に立ち、それが「思い出の曲」として記憶に残されるってこと。

とりわけ、何か特別なことがあった後のような、そわそわした初々しいカップルを見ると特にそう思う。

いつかこの二人が結婚して、披露宴か何かで僕らがその思い出の曲を演奏することがあったりしたら素晴らしいじゃないか。

残念ながらその夢はまだ叶えられていないけど、逆の出来事なら経験したことがある。

「あの曲を演奏してくれますか？」

彼にそうリクエストされた時、僕は数週間前の出来事をはっきりと思い出していた。

二人はまさにさっき話したような初々しさの残るカップルだった。二人とは初対面だったけど彼の方はその路上で何度か見かけたことがあって、でも、その日の彼は頑張っただけかき込んだ様子が見てとれて、それを僕は微笑ましく思った。

僕らの演奏を聴きながら、彼女は幸せそうに微笑み、それを見た彼も満ち足りた笑顔を浮かべていたけど、それは僕らの演奏が素晴らしかったからじゃない。

だから、その時に弾いた曲がなんだったかも、僕ははっきりと覚えていたんだ。

それから何度か二人がその路を通り過ぎていくのを見かけたけど、ここ数日は顔を見ない日が続いていた。

そして今、彼は一人。

演奏を聴いている彼の表情を見て僕は悟った。

愛は負けたんだな。

心破れた彼のために、僕の曲が少しでも慰めになるならそれも本望だ。

二人の物語は終わってしまったのだろうけど、僕はいつかまた彼から、あるいは彼女からリクエストされても応じられるように、その顔とその曲を覚えておくことにした。

その後も何度かその路上で彼を見かけることはあったけど、彼女が歩いている姿を見かけることはなかった。

Friday Night At The Universe

前にも書いたが、チップの入れ方には人それぞれ個性がある。

背広を着た年配の男性の中には、しばらく聴いた後にチップを出そうかどうか迷う人も多い。僕らとしては金額は二の次だけど、（おそらく飲み屋の女の子に渡し慣れているせいで）チップと言えばお札という感覚になっているらしい。

結果として、予期せぬ高収入となる事もあれば、迷った挙句に気まずそうに立ち去って行く人も多い。

（こっちとしては、迷った様子に気付いているだけに、黙って立ち去られると演奏を失格と言われた気分になる。小銭を入れたり、ただ微笑んでくれるだけでも嬉しいんだけど）

+

さて、今日も年配と呼ぶにはまだ若い、中年のサラリーマンが僕らの演奏を聴きながら難しそうに考え込んでいた。やがて、彼はおもむろに僕らに近寄ると、ギターケースから千円札を二枚抜き取った。

そういう展開になるとは思っていなかったのだから、僕はドキリとした。

ギターケースの中のお札は演奏中であってもすぐポケットに仕舞うように、何度も忠告されたことがあったからだ。

はたして、彼は二千円を抜き取ると、反対の手に持った五千円札をそっとギターケースに置いた。

つまり彼は、チップを渡したいけど細かいお札がないという理由で悩んでいたのだ。

彼は恥ずかしそうにはにかんで立ち去って行ったが、僕の方が自分自身を恥じた事は言うまでもない。

去っていく彼の後姿は格好良かった。

+

後日、似たような事があった。

僕が一人でギターを弾いていると、ヤンキーっぽい男性がギターケースの前にしゃがみこんで、ひーふーみーと数えながら小銭を拾い集め始めたのだ。

さすがにこれはマズいと思い、行動を起こそうとしたその時だ。

彼はポケットから千円札を取り出して僕に見えるように突き出すと、それをギターケースの中に入れてこう言った。

「帰りの電車賃無くなっちゃうからさ、ちょっとだけお釣りもらうわ」

僕は安堵と、紛らわしいことするなという怒りと、自分自身への恥ずかしさと、嬉しさと、有難さと、こそばゆさと、複雑な感情が入り混じったまま彼を見送った。

F氏と二人で演奏していると、お客さんからあの曲やってという注文、いわゆるリクエストを受ける事が多い。

得意不得意はあっても好き嫌いの無い僕らは、可能な限りリクエストにお答えしている（特にチップをくれそうな相手ならなおさらだ）。

僕らを弾き語りフォークデュオと勘違いして、有名なアーティストの代表曲をやってくれというのが多いが、僕らをインストデュオと理解した上で、マニアックな選曲を注文されることも多い。

後者の場合、全てのリクエストにその通り答えたり出来ないけど、幾つかの対応策がある事はある。

その一つは、ボサノバ、ジャズ、スパニッシュ、ハワイアン、クラシック、ロシア音楽、懐メロ、軍歌、民謡とあらゆるジャンルの中から代表曲を一曲弾けるようにしておく事だ。

リクエストする人の大半は、そのジャンルの愛好家だから「その曲は弾けないけど、この曲なら」と提案することで満足してもらえることが多い。

それでも追い付かない場合には、即興でそれっぽい演奏をすることも少なくない（その際、それっぽいタイトルをでっちあげたり、それっぽい架空のアーティスト名をでっちあげる事もある）。

さて、前者の有名なアーティストの曲を頼まれた場合。

困ってしまうのは、世間的には有名な曲でも、僕は知らない曲が多いという事だ。F氏が知っている時は、彼に歌ってもらい、僕は控えめにギターで合いの手を入れる。

だが、F氏も知らない時は即興で対処するしかない。

幸い、F氏は弾き語りを何曲もこなしているので、聞いた事のある曲なら勘で何となく伴奏を付ける事が出来る。そこに、僕が僅かな記憶を頼りに、単音でメロディを弾いていくのだ。

音楽をやった事のある人なら分かると思うけど、歌いやすいメロディを楽器で辿っていくのはなんとか出来ない事もない。

問題は、複雑な転調が入る曲の場合だ。

そんな時は流れを追いかけるのに必死で、冷汗タラタラになってしまう。

+

さてある日、僕は驚くべきことを発見した。テレビで先日リクエストされた某有名曲を聴いていたら、あれほど僕を困らせた転調が一回も起こらないのだ。

あとで白状させたところによると、F氏は単調な伴奏に飽きると勝手に転調やリズムチェンジを入

れていたそうだ（名曲と言われるヒット曲ほど、単純な和音の繰り返しで出来ている事が多い）
。

僕は呆れつつも、彼の編曲家として手腕に感心してしまった。

Tips Of Tip Part 2

いかにしてチップを受け取るか？

路上演奏家にとっての命題である、そのテクニックの、今日は第二回。

主題は、「ギター・ケース(或いはその他のチップ用バスケットなど)にいくら「見せ金」を置いておくべきか」という問題。

路上演奏家にとって、最も稼ぎ場所となるのが飲み屋街の出入り口。

そこが高級な飲み屋街であればある程、酔った重役レベルのサラリーマンによって万単位のチップが入ることが多くなる。

(前にも書いたかもだけど、飲み屋帰りのサラリーマンは「お店の女の子」に渡し慣れているせいで、「チップはお札で」と考えている人が多い)

この場合、経験上、ケースに入れておくべき「見せ金」は「小銭が幾つかと千円札を二、三枚程度」。

この千円札の枚数というのは重要で、小銭ばかりではしけた演奏家だと思われてチップを貰えない事も多いし、かといって五千円札や、万札が入っているのは「路上演奏屋のクセに生意気な」と思われたり、不逞の輩に盗まれたりする危険が高いからだ。

という訳で、ケースに高額紙幣が入ったら、すかさずポケットにしまうこと(たとえ演奏の最中であっても)。

そして、そのせいでケースのお札が一枚も無くなってしまったらポケットから千円札を何枚か補充すること。

これが、いわゆる「最も稼げる方法」だ。

でも、高級飲み屋街付近での演奏は危険が付きまとう。

たちの悪い酔っ払いが絡んできたり(付近に警察官がいても、路上演奏家風情が相手と分かると見て見ぬ振りをされたり)、

それ以上にたちの悪い「ショバ代」を要求してくる輩や、その手合いの下っ端連中や不良連中が絡んできたり。

そして、何より僕らの場合、各店から洩れるカラオケや呼び込みやらの騒音によって肝心の演奏が簡単にかき消されてしまうという問題がある。

*

そこで最も稼げる繁華街を避け、交通量の多い駅前も避け、それでいて音が迷惑になる住宅や「生活者」から離れていて、静かでそれなりに人通りのあるスポットとなると、場所はおのずと限られてくる。

ということで、ここからが僕らの場合。

中にある小銭は総額で千円から二千円ちょっと。

でもポイントは五百円玉を何枚か入れておくこと。

そして、一円玉や五円玉といった少額貨幣は(それはそれで入ってくるのは有難いけど)暇を見てポケットに仕舞い、増え過ぎないようにすることだ。

ひったくりの心配はあるけど、場合によっては千円札の一枚くらいは置いておいてもいいかもしれない。

理由は前述したように、少額の小額ばかりだと、単に財布を軽くする目的で一円玉ばかり入れられてしまうから(最悪の場合、ゴミ箱代わりにレシートや紙くずなんかを入れられたりも)。

そして、五百円玉や千円札があれば、それが「引き」となって同額のチップが舞い込む可能性が高くなるからだ。

注意事項も前述したとおり。

高額紙幣はたとえ演奏の最中でも(それを入れてくれたお客さんが去ったら)、すぐポケットにしまうこと。

それから、ケースの中の小銭は多すぎず、少なすぎず、適度な量になるように暇を見て調整すること。

それから、状況によっては高額紙幣は靴底などに隠してしまうのが賢明だったりもする。(なぜって、深夜の路上には単なるひったくり以上に凶悪な連中も多いから)

でも、これに関しては(僕にとっては)笑えないエピソードがある。

ある日、近所のスーパーマーケットで買い物をしていた時、財布を忘れたのに気が付いた。

(正確には普段財布は使わずジーンズのポケットに入れているのだけど、洗濯したての空の(?)ジーンズをはいてきた事に気づいた)

で、コンビニなら商品を棚に戻して家に戻ればいいけど、その時はカゴいっぱいに入っていて既にバーコードを打たれ始めていたし、後ろには次の買い物客が整列し...

そこで、靴底にお金を隠していた事を思い出した僕は、全ての商品を打ち終わる前にスニーカーの裾からお札を取り出し、それで料金を支払ったのでした。

あの時の僕はさぞ、不審人物に思われたことに違いない。

(でも、レジのお姉さんはレジ打ちに集中していたから気付かなかったかも)

とはいえ、しばらくはそのスーパーマーケットに行きづらくなった僕でした。

アルハンブラの思い出の思い出

いかにもお洒落に気を使っていそうな、綺麗な彼女を連れてお兄さんがやって来て言った。

「アルハンブラの思い出は弾けるかい？」

かなり、リクエストしなれた口振りだ。

さては、僕のようなクラシック・ギターをかまえた路上演奏家を見つけたら、いつもリクエストしているな。

あるいは、自分が音楽にも詳しいという事を、横にいる彼女に見せつけたいのかもしれない。

そんなわけで僕は違う曲を提案した。

(いやウソだ。アルハンブラはうろ覚えで自信が無かったし、その日は寒くて指が動かなかった。ただ、弾けませんと言うのが悔しかったのだ)

「アルハンブラも良いけど、トレモロならこんな曲もありますよ」

そう言って僕は即興演奏を始めた。

即興演奏といっても、完全なその場の思いつきじゃない。トレモロ奏法という演奏法を練習している時に何となく思い付いた、下書きの様なものは出来ていたのだ。

ひとしきり演奏し終わると、彼は興味を持ってくれたようで、その曲は誰の曲か？と聞いてきた。

僕は適当な曲名と、適当な外国人の名前をいって、さらに彼は戦後のドイツで活躍したなどウソをついた。

数日後、いつものようにギターを弾いていると彼がやって来た。

今度は彼女と一緒になくて、服装も僕と似たような地味な格好だった。

「やっと見つけたよ」

と彼は言った。あれ以来、その場所で演奏するのは初めてだった。

「あれから君の言った曲を探して見たけど見つからないんだよ。もう一回教えてくれるかい？」

そう話している彼は、最初の印象と違ってかなりイイやつのように見えた。

けれども、気の小さい僕は白状出来ず、オワビのつもりで他にこんな曲もありますよ、と言って、二、三曲、演奏した。

(無名な音楽家だから日本で探してもCDはないと思いますよ、とは言っておいた)

すると、彼はいたく感動したらしく、しきりに頭を下げて去っていった。

僕ははじめから「アルハンブラの思い出」を弾いておけばよかったと、胸が痛んだ。

アルハンブラの思い出の思い出 その2

「良いですよ」と言ってしまった。

まあ、彼女は可愛かったし、その日は暖かくて割と指も動く方だった。

さて、アルハンブラだ。

この曲の厄介なところは、トレモロ奏法という三本の指を順に動かしてタラタラと連なった音を延々と弾き続けなきゃいけない所で、そのうえ親指は別の動きをしてメロディを弾かなきゃいけない。

おまけに、一番の問題は譜面がうろ覚えだったこと。

話を戻すと、数十分前から通りの向かい側で演奏を聴いている若い女性がいた。

若いといっても、僕より少し年上のようなのだ。

どうしても目が言ってしまうのは、彼女がまるでレインコートみたいな、真っ赤な目立つ色のジャケットを着ていたからに違いない。

やがて目の前のお客さんがいなくなると、彼女は近寄ってきて、僕の真正面でしゃがんだ。

「アルハンブラ？」

質問だかなんだか分からないような言い方で、それがリクエストだと気づくまでに時間がかかってしまった。

そして、冒頭のセリフに繋がるというわけ。

僕は不安はあったものの、気を落ち着けて演奏を始めた。

近くで見ると彼女は思ったよりずっと若く、大きく綺麗な茶色い目をしていた。

演奏中、彼女がその大きな瞳でまじまじと覗き込んでくるものだから、僕はたじろいでしまった。

路上で演奏している時はなるべく顔をあげて、下を向かないようにしているのだけど、どうしても目を反らせてしまう。

だって彼女の表情はまるで…。

「そこ」

と言われて僕は顔をあげた。

その拍子に指がもつれ、音がバラバラになる。

彼女がニッコリと微笑むと、大きな瞳が二つの茶色い三日月になった。

彼女は言った。

「そこ、指の押さえ方が間違ってる」

Yoshi

あの頃の僕らは、免許を取ったばかりの友達の車で東京の夜を意味も無く走り回って、営業時間の終わったレジャー施設に忍び込んだり、深夜営業の卓球場やファミレスで時間を潰したり、廃墟巡りしたりという、十代後半の青少年なら誰でも経験するだろう遊びをしながら、ありがちな不満を抱えて生きていた。

今も覚えているのはこんな新年終わりの首都高の夜のことだ。

あの時、君は爆音で流れるカーラジオを聴きながら「こんなのはロックじゃない！」と叫んでダッシュボードを叩いたけれども、ラジオで歌っている吉幾三は演歌歌手であって、たしかにそれはロックではなかった。

そして君は、何か嫌なことがあると「人間め！」と悪態をつくのが口癖だったね。

当時の僕、つまり、セネガル帰りのときめくハイティーンには分からなかった事だけど、あの頃のぼくらはただやり場の無い不安を抱えて、それを何かにぶつけていたかっただけなんだ。

そんな忘れていた時代の友人に、子供ができた事を知った。

初めて届いた年賀メールに一言、

「**は今年で1歳です」と。

僕は君にパートナーが出来たことも、**なんて名前の子供が生まれたことも知らなかった。

ともあれ、してみれば君も普通の人間だったという訳だ。或いは。

おめでとう。

心から祝福するよ。

君のロックは見つかったかい？

音量の話

今日はちょっと難い（かたい）話。

路上演奏家にとって重要なファクターである、音量についてだ。

路上演奏に対して寄せられる批判に、

「コンサートやライブは聴きたい人間だけが聴きに行くものだが、路上演奏は聴きたくもない人間に無理矢理音を聞かせている」

と言ったものがある。

この言葉、半分は事実だけど、半分は逆の解釈も出来る、と僕は思う。

コンサートやライブ、どんなにひどい演奏だったとしても、一度入ってしまえば簡単には出る事は出来ない（多くのホールでは演奏中の出入りを禁じているほどだ）。

だけど、路上演奏なら気に入った観客は立ち止まればいいし、そうじゃない人はそのまま通り過ぎれば良い。

その間、僅か数秒。

言ってみれば、僕らはその数秒に勝負をかけて演奏をしているわけだ。

ただ、その点から言うと、場所をわきまえずに大音量で演奏したり、不必要に音量を電氣的に増幅している人々を僕は同じ路上演奏家とは呼びたくない。

交差点や停留所といった、人々が立ち止まらなくてはならない場所をわざと選んで演奏している輩も同様だ。

彼らは（僕に言わせれば）街の雑踏や表現の自由という言葉を言い訳にして、勝負を逃がっているのだ。

そして、彼らのせいで純粋な路上演奏家もあらぬレッテルを貼られ、周辺住民の苦情という形で演奏場所を奪われてしまう…。中には、それで生活の糧を失ってしまう人もいるのだ。

+

少し語気が荒くなってしまったようなので、ここで聴いてもらいたい話がある。

それは、路上で知り合ったあるロック・ギタリストと共演した時の話。きっかけは彼が僕らの演奏に興味を持ち、一緒にジャムろうと声をかけてきた事に始まる。

彼は普段、大容量のアンプで拡声したギターを（それも音が良く響く高架下トンネルの入り口で）弾いているのだけど、その日は僕らに合わせてアンプを介さずギター一本で演奏する事にな

った。

その日の演奏は、僕らにとってはいつも通りだったのだけど、終了後、ロッカーの彼は気になる事を言った。

「今日は客が多くて緊張した」と。

彼の方が路上の常連で、いつも僕らよりずっと人通りの多い場所で演奏しているというのに、いつもよりお客さんのプレッシャーを感じたというのだ。なぜか？

僕はそれが距離の問題なのだとすぐに気づいた。

僕らの演奏を聴くお客さんは、雑音を避ける為に僕らのすぐ目の前までやってこなければならぬ。

(時には、街の喧噪から守ってくれるかのように集まったお客さんが人壁を作ってくれることすらある)

けれども、アンプを使って演奏する彼の前では、人々は足早に立ち去るか、聴くとしても通行人を挟んだ通路の向かい側の壁に距離を置いて居並ぶ事になってしまう。

去り際、彼に「アンプもないのに、なぜそんな迫力ある演奏が出来るのか？」と聞かれたので、ごく簡単なアドバイスを伝えておいた。

+

「明瞭さとは、明暗の適切な配置である」

そう言ったのはハーマンだったと思うけど、この言葉、こうも言いかえられると思う。

「ダイナミクスとは、音量の大きさではなく、
強弱の適切な配置である」

+

+++

+

最後に大サービスして、路上演奏家のウラワザを一つ紹介しよう。

人通りが少なく、辺りに誰もお客さんがいないなと思ったら、いつもより少しだけ大きな音で演奏してみる。

これは、ここにこんな演奏をしている輩がいますよ、と知らせる為だ。

そして、誰かが近寄って来たと思ったら、音量を少しだけ下げしてみる。

(大きな音のままだと、離れた所から聴いているだけか、少しだけ聴いて満足して立ち去ってしまうことが多い)

そして、お客さんが目の前まで来たら、気付かれないように(決して音楽のテンションは落とさずに)音量をさらに少しだけ小さくする。

すると、彼女(もしくは彼)は演奏が気になって、さらに近づいてきてくれるだろう。

そう、チップを待ち望んで口を開けたギターケースに手が届く、すぐ近くまで。

路上のメリークリスマス

寒い夜だった。

空虚な祝祭の雰囲気になり上がる歓楽街と、それとは全く不釣り合いに無表情で通り過ぎていく人々。

最初に立ち止まったお客は男女の二人連れだった。

「なに弾いてるの？」

急に場違いな、あどけない無邪気な顔が目の前に表れて、僕は動揺した。彼女は寒そうな学校制服（高校なのか中学なのかは分からなかった）に、お決まりのルーズソックスと大袈裟なマフラー。付き添って立ち止まった男は高級そうなコートの子供のサラリーマンで、なんだか不機嫌な表情だった。

プレゼントを買いに来た仲の良い親子。なら良かったんだけど、二人の雰囲気はどう見ても家族じゃない。

こんな時、僕は何とさえいいたいだろうか？

「おい、さっさと行くぞ」

見かけによらぬ柄の悪い口調で男が言い、二人が立ち去る。

と、不意に街の雑踏がボリュームを増したように感じ、僕はギターケースをしまって場所を変える事にした。

「おっばいいかがですかー!?おっばーい！」

すぐそばで、黒づくめの呼び込みが声を張り上げる。

不愉快極まりない連中で、いつもならただ無視して通り過ぎるだけなのだけど、その相手は少々たちが悪かった。

「どうですか、お兄さん?!良いおっばい揃ってますよ！」

強く肩を掴まれ、振り返った拍子に目と目が合う。

もしかしたら、僕があまりにも疲れた顔をしていたせいかも知れない。それが彼の顔に伝染し、瞬間、視点が入れ替わる。

夕方からこんな真夜中まで寒空の下、通行人に声をかけ続けてきたけれど反応は乏しく、ついにはこんな金の無きそうなギター弾きにまで声を掛けてしまった。

僕の肩を叩き、同類を哀れむような表情で、彼が力なく微笑む。

僕は幸運を祈るように交差させた指をたて、

「メリークリスマス」

と言った。

昼下がりのロマンス

今日は、音楽をやっていて嬉しかった事ベスト5に入るような出来事がありました。それが何かというと、演奏中に可愛い女の子から花を貰ったのです。

観客から花束を貰うなんていうと大きなホールでコンサートする一流アーティストみただけど、路上で花束を貰う事は、実は珍しくありません。もっとも、それは歓迎会や送別会やなにがしかのパーティー帰りのグループが酔っ払った勢いで貰った花束を押し付けてくるケースが全てなわけですが^^;

だけど今日の出来事は、いつもの路上では無くいつもの昼間の公園で起こりました。そして、可愛い女の子というのは本当に小さな女の子の事で、おそらくは小学校に上がる手前くらいだったでしょう。

+

さて、僕が昼下がりの公園で練習がてら気ままにギターを弾いていると、遠くで遊んでいる子供たちの声が聞こえていました。

するといつからか、一人の女の子が遠くから様子を伺うようにこちらの演奏を聴いていたのです。

僕が気付くと、彼女はすたすたとどこかに走り去って行きました。

そして戻ってくると、今度は僕の目の前までやって来て、何やら後ろ手に隠し持ってもじもじしていたのです。

彼女はきっと、大きなコンサートなどで観客が出演者に花束を渡す習慣があるのを、何かで知っていて真似してみたかったんでしょう。

僕が演奏を止めると、彼女はそれを待っていたように、「ハイ」と言って後ろに持っていた物を差し出しました。

それは、公園の片隅に生えているシロツメグサとオオイヌノフグリでした（どちらも雑草と呼ばれる花ですが）。

でもその小さな花は小さな彼女にピッタリで、酔っ払いから大きな花束を貰うよりも嬉しかったのは言うまでもありません。

僕が「ありがとう」と言って小さな花束を受け取ると、彼女は「ニヒヒ」と笑って走り去って行きました。

そして僕はその後、大きなホールでコンサートをする一流アーティストになったかのような、

ちょっと良い気分でギターを弾いたのです。

+

P.S.

以前にも、ずっと演奏を聴いていた子が次の日、（多分、親から貰って）百円玉を持って来てくれた事がありました。

子どもからお金を取るなんて最低！と思う人もいるかもしれませんが、僕も小さい頃そんな風に大人の真似をしたがっていたことを思い出したので、その百円は有り難く頂きましたm(_ _)m

世界がまんべんなく明るいから

今日は（昨日からはというべきか？）明け方まで演奏し続けた。
そして、朝の光に照らされた電灯の消えたネオン街を見てこんな事を考えたんだ。

それはネオン街というよりも、夜の残骸と呼ぶ方がふさわしい。
夜の間、ネオンに照らされて隠されていたビルの壁面や建物の隙間の狭い路地は、朝の光の中では目を背けたくなるほど醜い。
吹きだまりのゴミ溜め、破れかけた猥雑な貼り紙、ただ描きなぐっただけの落書き、汚物の跡、
、、、。

それらは夜の間、闇ではなく、むしろ目に飛び込んでくるネオンの光によって覆い隠されているのだ。

そして、ふと思った。
ひょっとしたら、僕らの住むこの世界も同じことなのかもしれない。
飛び込んでくる映像、見ようとせずとも見せようとされる情報があまりにも強すぎるから、僕らはその背後にあるものを知ることが出来なくなっている。
第三世界の貧困、蔓延する病、常態化した戦争、環境汚染、、、、。
世界が再び闇に包まれるまで、僕らはその足元で起こっている様々な出来事を観ることは出来ないのかもしれない。

+

世界がまんべんなく明るいから
僕は、どこにも行く場所がなくて
僕はここにいる

世界がまんべんなく明るいから
僕は、どこにも君を見つけられなくて
僕はここにいる

信じられないような本当の話

今日あった、ちょっと特別な出来事。

いつもの公園にギターを弾きに行くと、何やらお祭りイベントを開催していた。市や官公庁が主催の、なかなか大規模なイベントらしい。

通りかかると、揃いのウィンドブレーカーを着たスタッフの人々が頭を下げて挨拶してくる。公園で、見知らぬ人と挨拶を交わすのは気持ち良いものだが、ちょっと様子がおかしい。彼らの挨拶は仰々しすぎた。

僕はぎこちない会釈を返して通り過ぎようとしたが、彼らは手招きすると、僕をイベント会場のステージの方に誘導し始めた。

僕はそこで、初めて気付いた。

彼らは僕が、ステージで演奏する予定のミュージシャンか何かだと勘違いしているのだ。

僕が慌てて誤解を解こうとすると、今度はステージの担当者らしきインカムを付けたおじさんがやって来た。

話を聞くと、なんでもこれから演奏する予定のオールディーズ・バンドの到着が遅れているそうだ。そして、さっきからぬいぐるみのショーを延長してやって貰っているが、そろそろ間が持たなくなっているらしい。

そこで、僕に何か演奏してくれというのである。

おじさんの困っている気持は良く分かる。

しかし、僕は、、、困ってしまった。

+

ステージに上がった僕は、さらに困ってしまった。

どうやら僕は、弾き語りのフォークシンガーとでも思われていたらしく、ステージの中央にはスタンドマイクが一本だけ。

けれども、僕には弾き語りのレパトリーなんてないし、僕のギターには立って弾くためのストラップも付いていない。

仕方なく僕はステージに上がると、マリアッチ・スタイルでギターを抱え、口もとの高さにあわされたマイクスタンドをギターのサウンドホールの高さに合わせた。

そして、集まった大勢の観客を前に言ってしまった。

「さて、お待たせしました」

その後、さらに驚くべきことが起きた。

果たして僕の身に何が起きたのか？

それは、皆さんの想像にお任せします。

いつかの明日へ、続く

+

その日、僕がベッドに入ろうと布団をめくると、そこに小さな灰色い毛むくじらの生き物がいた。

そいつは「ニヤー」と、猫みたいな声で鳴くと、突然部屋の中を駆けずり回り始めた。とはいえ、逃げ場所はないから狭いワンルームの部屋の中を隅から隅へと。

その猫みたいな生き物は（あれは猫だったのだろうか？だとしたら、僕は今までの猫が好きという発言を撤回しなければならなくなる）、部屋中のパソコンやら楽器やら着替えやらをボロボロに荒らしまわった挙句に、開けてやった窓から一目散に逃げ去った。

その日、僕は昼間暑かったので、少しだけ高窓を開けて外出していた。

してみれば、あいつはその間に僕の部屋に侵入し、その後僕が帰宅して窓を閉め、夕食をとったりシャワーを浴びている間、ずっと僕の毛布の中に隠れていたわけだ。

次の日、部屋を元に戻すのに丸一日かかった。

++

奴は、アパートのあちこちの部屋にお邪魔して魚やらミルクやらを平らげていた。

だから、彼女はあちこちの部屋でミケだのムーン（これはあの映画からとったんだろう）だの色々な名前で呼ばれているのを僕は聞いた事がある。

けれども、奴が寝床に選ぶのは決まって僕の部屋の庭で、とりわけ二層式洗濯機の洗濯槽に入っ
て寝るのがお気に入りだった。

とどのつまり、猫と言うやつは人にかまわれるのが嫌いなのだ。

人間なんて、利用するだけの存在としか思っちゃいない。

せいぜい、カワイこぶって餌さえ貰えればそれで満足なのだ。

その点、僕は餌もやらないけど可愛がったりもしないから、奴にしてみれば僕の庭が静かに過ご
せて居心地が良いという事になったのだろう。

（それがメスだという事も、沢山いる「飼い主」の一人から聞いて知った。もし奴が人間なら、
尻軽や八方美人という言葉がピッタリだったろう）

とはいえ、真夜中の格闘を演じたおかげで、窓を開けていてももう中に入ってくることはな
かった。

そうして、たまに僕が洗濯をしようとするすると邪魔物のように睨んで来ることを除けば、僕らの同

居生活(ご近所付き合いというべきか?)は上手くいっていた。

さっき部屋に入ってこなくなったと書いたけど、僕がギターを弾いている時は別だった。

その猫は、僕がギターを弾いているといつの間にか忍び寄って来る。そして、僕の足を電信柱か何かと勘違いして、体擦りつけて来るのだ。

そんな事が何回かあった。

これは大きな驚きだった。

僕の経験上、犬や猫が音楽に反応して行動するなんてことはなかったからだ。

(サクソやトロンボーンならその音色に反応して遠吠えする犬もいるかもしれないが、ギターなんて彼らはやかましい雑音としか思っていないだろう)

けれど、やがて僕は気付いた。

彼女は(そう、この頃には僕と彼女は、お互いに下の名前で呼び合うくらい親しくなっていた)、僕が何かに没頭している時ならば、電信柱代りにすり寄っても追い払われないことを知っていただけなのだ。

+++

P.S. ところが、彼女はしばらく経つとバツタリと姿を消した。

その頃、夜中じゅうやたらと大声で鳴くようになり、ちょっときつめの声で叱ったのだが、それっきり帰ってこなかったのだ。

まったく、こっちがその気になりはじめると、いつも何も言わずにいなくなる。

けれども三カ月ほどして、彼女は僕の庭にやって来た。

黒い大きな猫と、一目で彼らの子と分かる灰色と黒の子猫が四匹一緒だった。

夜とギター弾きと金時計

あるいつもの様な夜のこと、
店仕舞いしてギターをケースにしまおうとした時、その陰に女性用の金色の腕時計が置かれているのを見つけた。

ケースの中にはなく、その傍らに。

ちょうど僕からは陰になるような位置に置かれていたから気付かなかった訳だ。

時計は見るからに高級品。

そして、丁寧に文字盤を上にしてベルトを揃えて置かれた様子は、それが落とし物でない事を表している。

あるいは忘れ物だろうか？

演奏を聴いてる間に煩わしくなって外し、そこに置き忘れた。

確かに、そういった女性客の心覚えは何人かいる。

今日は遅くまで演奏を続けていたので、仕事を終えたホステスさんといった、いわゆる水商売系の女性のお客様が何人か立ち止まって、時には目の前にしゃがみ込んで演奏を聴いてくれたのだ。

だけれども、忘れ物としては不自然な置き方でもある。

演奏に対するチップの代わりに、お金以外の貴金属とかそういった貴重品がケースに入れられる事はごく稀にある。

これもそうしたチップ代わりの一つで、僕に気を使わせないように、さり気なくギター・ケースの陰になる位置に置いたのだろうか？

だとしても、疑問は残る。

大方、水商売のお姉さんが店のお客からプレゼントされて、趣味に合わないとか、同じものを持ってたという理由で手放したという予想が正しいのだろう。

でも、こんな風な想像も膨らむ。

例えば、主人公はやはりクラブ等で働く水商売の女性。

そして、腕時計も客からのプレゼントだったとする。

男性客の方は勿論彼女に気があり、そして彼女の方でも彼に対して多少なりともその気があったとしたら....

とはいえ、情に流されては水商売はつとまらない。

だから、プレゼントを受け取る事も出来ず、いつもの様に質屋に入れたりゴミ箱に投げ捨てたりする事も出来ずに、
僕のギター・ケースの傍らに、そっと置いて残した。

というのは、僕の考え過ぎだろうか？

あるいは時計を置いたのは男性客で、渡したプレゼントを突き返されたか、勇気を出せずに渡せないままできて、やり場に困ってそこに置いたのかもしれない。

結局、その時計は落し物として交番に届けたり(質屋に入れたり)せずにポケットに入れて持ち帰り、
後日、詳しい友人に見せた所、確かに高級品でニセモノでも無さそうだという事が分かった。

という事で少し困った事になった。

例え裕福な身でないとしても、上に書いた様な想像が膨らんでしまった以上、おいそれと質屋で換金する気にはなれない。

そして、いつか彼女は気が変り、あの日の事を後悔し、
もしかしたら今頃、僕の事を探し回っているかもしれない。

という訳で、その日から毎回、路上演奏に行く時には(傷つけないようにそっとハンカチでくるんだ)その時計をポケットに入れて持ち運ぶようになった。

来る日も、来る日も。

勿論、「彼女(彼)」は(というか本当にそんな客がいたのかすら分からないけど)表れなかった。
やがて、腕時計の針も止まり、僕がそれを持ち歩かなくなったのはどの位経った頃だろうか。

そして、文字盤にダイヤの並んだ金色のか細い腕時計は、今も僕の机の引出しに仕舞われている。

そして、止まったままの物語も、引出しの中に仕舞われたまま。

公園の夜

ギターは弾きたいけど路上には出る気がしない夜（相方の都合がつかなかったり、一人じゃなんとなく気が乗らなかったり、なんとなくお客さんが少なそうな気がした時）、そんな時、僕は大概近所の公園でソロ・ギター演奏することになっている。

その公園はただの砂場とかあるだけの公園よりは広く、かといって「市民公園」とか名前がつくほど広くはない中位の広さの公園なのだけど、僕が演奏しているとジャージを着てウォーキングをしている人々が何組も目の前を通り過ぎていく。

その大半は中年期を過ぎたご夫人方で、中には大分早足な年配の紳士もいるのだけど、その人たちが帰るのは遅くとも夜の九時くらい(きっと彼らは朝起きるも早いのだろう)。

でもその中に一人、僕が演奏していると夜十一時を過ぎてもウォーキングを続けている若い女性がいた。

で、僕らの住んでいる地域はお世辞にも治安が良いとはいえず、特に女性を狙った通り魔事件というのが全国でも有数なほど多い町だった。

彼女は僕の前を通り過ぎる時に、軽く笑顔を向けてウォーキングというよりジョギングと言った方がよさそうなペースで颯爽と通り過ぎていく。

で、さほど広くない公園だから数分おきに、ちょうど曲がひとつ演奏し終わる程度の間隔をおいて彼女は僕の目の前を通り過ぎる。

だが、僕のいるベンチの上には街灯があって明るいけど、公園のウォーキングコースには暗がりも多い。

女性が一人でウォーキングする事に危険は感じないのだろうか？

で、ある日、彼女が休憩のストレッチを僕のベンチの目の前で始めたので、前から気になっていたその点について尋ねてみた。

彼女の言うには、

「だって、あなたのギターが聞こえる場所にいるってことは、何かあった時に叫んだらあなたには聞こえるってことでしょう？」

ということらしい。

世のギター弾きがすべからく善人で無い事は自分自身を例にとってみても言える事だけれど、もし僕が良からぬことを働こうと思うならわざわざギターなんて弾いてないだろうし、彼女の考え方は多分正しいのだろう。

だが、そうなってくると責任重大だ。

そして、いざという時に僕にどんな行動力があるというのだろうか？

そして、一つ困った事にもなった。

公園で練習中、ほんの少しでも人の声の様なものがすると気になってしまい、僕は演奏に集中できなくなってしまったんだ。

+

僕はしががないギター弾き、

道行く人は目もくれず、

拍手を聞くなど夢の夢、

それでもギターのケースに貯まる、

小銭が鳴ったら僕は満足。

何故ならそいつは今夜の飯代、

も一つ鳴れば明日の朝飯、

も一つ鳴れば明日の昼飯、

も一つ鳴ったらツケ払い。

僕はしががないギター弾き、

道行く人は足をも止めず、

拍手を聞くなど夢の夢、

けれども、過ぎ行く間際に向いた

笑顔が見れたら僕は満足。

何故ならそれは明日のやりがい

何故ならそれは心のぬくもり

何故なら儂い街の灯

僕はしがないギター弾き

路上の歌

Ich Clark, der Strassenkünstler:

Look mich Jetzt;

Mein rucken zur wand, abspielen von musik:

Erste Lied fur Passanten, die frohlich die Strase;

Zweites Lied fur Verliebte, die voller atomosphere;

Dritte Lied fur ein Unternehmen ein Mann, anschichten ihn;

Vierte Lied fur einen betrunkenen reich, zu erhalten Geld;

Funfter Lied fur Obdachlose, statt Wiegenlied;

Letzte Lied fur mich, zu glatt uber meine Gefuhle verletzt:

(Clark)

最初の一曲は道行く人々のために
せわしい通りを明るくするため

二つ目の曲は恋人同士のために
甘いひと時を盛り上げるため

三つ目の曲はあるサラリーマンのために
疲れた心をいやすため

四つ目の曲はクラブ帰りの重役様に
明日への路銀を稼ぐため

五つ目の曲は路上の住人に
場所代替わりの子守唄に

最後の一曲は自分のために
孤独な心を慰めるため

楽園？

路上では、いわゆる「おせっかいおばさん（おじさん）」にしょっちゅう遭遇する。中には親身にアドバイスをしてくれたり、時にはそれが役立ったりもする訳だけど、「滞在時間」の長さや「手に負え無さ」という点では、酔っ払い以上に厄介なのがこのタイプかも知れない。生ギターのインストゥルメンタルという特性上、演奏中なのをお構いなしに話しかけられたりも。

大概のおばさん・おじさんは僕らを、いわゆる「メジャー・デビュー」というのを目指す、夢に溢れた若者だと思って話しかけてくる。そんな人々の中には、僕らがチップ目当てに演奏していると知ると途端に軽蔑するような態度に変わる人もいたり。

もう一つは僕らを「路上演奏家」と理解した上で、もっとこんな曲を演奏した方が良いよ、とか、もっと大きな音で、等々と指摘してくるパターン。曲に関しての「リクエスト」という事なら応じたいけど、音楽の方向性なんてものは自分たちのやりたいように決めたい。それから音量に関しては、生楽器なので物理的に不可能な要求という場合が多い。（「少なくとも今、そばで喋っている貴方が黙ってくれば他のお客さんがもっと演奏を聴きやすくなるのに」とか心の中で思ってみたり）

それから、何故か多いのが「場所」に関するご意見。君たちの音楽なら、どこそこの街の方が聴いてくれる人が多い、とか、どこそこの方がきっと儲かるよ、とか、なかにはドイツの某という通りで演奏したら良い、とか無茶なものも。

でも、どこで演奏するのがベストかは僕ら自身が一番経験を積んでいて、渋谷はいわゆる「ストリート・ミュージシャン」向きで、スピーカーを使った大音量な演奏が多い、新宿は警察の取り締まりがうるさいし、警察とは仲の悪いグループの人々も多い、で、選んだのが池袋。それでも色々と苦労は多い。

でも、諸々のアドバイスとやらを聴いていると、そんな場所が本当にあるのならそこは路上演奏家にとっての「楽園」だと思ってしまうような街の話が幾つも出てくる。

(そんな所が存在しない事はほぼ確信を持って信じているのだけど)

で、「楽園」という言葉が浮かんで、ニュー・オリンズのとあるピアニストが語った言葉を思い出した。

「ニュー・オリンズの音楽は大きな美しい庭園の様なものだ。そして私達はその中の花々なのさ」と。

残念ながら僕らの街に美しい庭園は無い。

でも、路傍の草花でも心を和ませてくれる事はある。

で、それならば「僕はこの街の雑草でありたい」と、そんな事を考えた。

Winter Mute

雪までちらつき始めた冬の夜。

僕は駅コンコースに伸びる階段の下にいて、かろうじて濡れずに済んでいるとはいえ、そろそろ演奏も限界かなという寒さ。

思わず、指が引きつって調子っぱずれな音を立てる。

隣にいる彼女は、騒音にビクッと身をすくませる。

他にお客さんもいないものだから、ごく静かに演奏していたのだけど、突然の大きな音に驚いたらしい。

仕切り直して、またごく静かに演奏を再開すると、彼女はしな垂れるように僕に身をすりよせて来た。

彼女は小柄でまだ幼く、見るからに痩せていて、お世辞にも綺麗とはいえない(美人じゃないという意味ではなく)薄汚れた風体だ。

煤けて灰にまみれた、いわゆる路上の色。

そんな彼女が見ず知らずのギター弾きにすり寄って来たのは、それだけ冬の寒さが厳しかったからか、

或いは、僕のレザーブーツの革の感触が気に入ったのだろう。

(勿論、「彼女」と書いたのは僕の主観であって、実際にはオス・メスの判断はついていない)

そんなこんなで、これ以上チップは期待できなさそうだし、そろそろ引き上げようとした矢先、目の前に真白なふわふわの毛並みが飛び込んできた。

彼女は(今度は間違いなく人間の女性だ)、高そうな毛皮とアクセサリーを身に付けていて、歳は僕と同じくらいか。

一見、お金持ちのお嬢様といった風でもあるけど、この時間帯と化粧の具合を見れば、その職業は察しがつく。

その中でも二種類あって、仕事中は綺麗なドレスを着ていても、仕事が終わればダウンジャケットにジーンズといった出で立ちで帰宅するタイプと、そうではないタイプ。

してみれば、彼女は高級店に勤めているタイプという事だ。

(どちらのタイプであれ、僕が苦手なことに変わりはないけど)

彼女は、僕の足元の子猫に手を伸ばすと優しくその背中を撫でさすった。

でも、それは年頃の女の子が小動物を見ると「カワイイ」といって無条件にはしゃぎだすのとは違った、どこか寂しげな、儚げな表情。

ブーツに伝わる感触や薄い毛皮の上からの見た目から、僕にもその猫が寒さでブルブルと震えているのは分かっていた。

でも、だからといって僕に何が出来るというのだろうか？

彼女が意識せずに近くに寄るものだから、免疫の無い香りが鼻をくすぐって、僕は何も言わずに演奏を続けた。

しばらくの間、愛おしそうに震える子猫を両手で撫でさすった後、彼女は不意に立ち上がって去っていった。

良くある話。

僕は彼女の後姿を見ていたけど、足元でか細い鳴き声がして目線を落とした。

子猫が代わりのぬくもりを求めるかのように、僕を見上げている。

なんとなくそんな気になって、僕は演奏を止めるとその子を抱えあげた。

しばらく、所在なくその子を暖めてやっていると、先ほどの女性が目の前に戻って来ているのに気付いた。

「ちょっといいですか？」

そう言うと、彼女はしゃがみ込んで足もとにコンビニの袋の中身を広げ始めた。

ピクニックとかに使う使い捨ての紙皿、それから封の空いている紙パックの牛乳。

ご丁寧にそのミルクは、コンビニのレンジで温めて来て貰ったものらしい。

彼女が皿にミルクを注ぐのを見て、僕は足もとに子猫を降ろしたけど、その子は湯気を立てるミルクを警戒したのかなかなか舌を付けようとはしない。

すると彼女はその子を抱えあげ、純白の毛皮が煤で汚れるのもかまわずに膝の上に乗せた。

それから紙パックを手にとると、片方の手のひらにそれを注ぎ子猫の口元に持って行った。

当然、中身の幾らかは毛皮の上にもこぼれてしまう。

彼女が震える背中を撫でながら、手の平のミルクを促し続けていると、子猫はやっと恐る恐る舌を出してそれを飲み始めた。

「良かった…」

そう言うと、彼女はにっこり微笑んで僕を見た。

その時、僕も初めて彼女の顔に正面から向きあったかも知れない。

それが、たまらなく美しい笑顔に見えたのは、ちらつく雪とネオンのせいだろうか。

それから彼女は「いけない」と言って腕時計に目をやると、子猫を降ろし、
「お願いします」
と言ってギターケースにお金を入れた。

それがチップではなく、その子猫の為のものだという事は理解していた。
(だって彼女は僕の演奏を聴いていたわけではないのだから)

僕はコンビニに入ると、まずは温かい缶コーヒーを買う事にした。
(ひとまずこれで、始発までどこかのファーストフードで暖をとるという計画はなしになった訳だから)
それからツナ缶やら猫が食べそうなものを探したけど、コンビニにも缶詰のキャットフードがあったからそれを買った。

それから僕は、寒さを紛らわす為に結局、朝までギターを弾くことにした。
「彼女」はその間、僕の両足の間でもくもくと缶詰の中身を食べていた。

クリスマス・ストーリー

音楽とは関係ないけれど、泣ける話なんだ。聴いてくれるかい？

僕がいつもの演奏場所に向かおうと電車に乗っていた時、三人組の女子高生が乗り込んできた。準急列車はこの駅で各駅から急行に切り替わり、ここから終点までは停車駅は無しだ。

彼女達はいわゆるギャル風のファッションで、やたら大声で話すものだからいやが上にもその会話は耳に入って来た。

車内の他の人々も迷惑そうだ。

「部活休んで毎日深夜までバイトなんて、アンタも大変よね」

「ケンジの為だからね」

「まあ、プレゼントあげる相手がいるだけマシか」

「そんな事ないよ。ケンジの奴、最近すっごくワガママになって、思い通りにならない事があるとすぐ殴ってくるし」

どうやら、そのうちの一人がケンジという男性にクリスマスプレゼントを買うためにバイトしているらしい。

しかもその彼、相当に暴力的なのだとか。

なんとなくの雰囲気だけでも、僕には他の乗客も彼女たちの話に注意を向けているように感じられた。

「で、何買うんだっけ？」

「キックボードが欲しいって言ってたからさ、実はもう買ってあるんだ」

「じゃあ、どこに置いてあるの？」

「それがさあ、うちの部屋、二段ベッドしかないじゃない？で、私の布団の中に隠してるから夜寝るとき、ゴチゴチ当たって痛くってさア」

ここで話が妙な方向に展開したので、僕は首を捻った。

そして、彼女達は大声で話し続けた。

「そっか。アンタも良くやるよね」

「でも、親がいなくなったからって、信じ続けさせてあげたいじゃない？」

即興演奏家の言い分

それがどんなに稚拙であろうと、
ごくごく単純な理由として、音楽教育を受けていない僕にとっては、自由に音を鳴らすことが自然なことで、
ただ僕らは、決められたお題や台本によらず、自由に会話がしたいだけだ。

それと、安物の音楽名言集に載ってそうな、古い格言が一つ。
即興音楽は、確かにクラシックの様な伝統文化に基づくものではないし、かといって最新の流行音楽になる事もないだろう。
けれども、
「世界で最も古く、最も新しい音楽」
それが即興演奏だ。

それから、即興は常に自分の居る位置を確かめる為の指標でもある。
大海原を照らす灯台の様に。

「個性が大事」とか、当り前の様に言うけれど、その「個性的」という言葉に騙されて本当の個性を無くさないように。
「個性」とか呼ばれる「流れ」に流されないように。

そして、僕は単純に即興演奏が好きだ。

クリスマス・ストーリー 2

気まずさは2曲前から感じていた。

目の前には深刻な顔の中年サラリーマン。噴水広場の円形ベンチ。でも、お客さんは円の外側を向いて座り、僕はその目の前の石段に座っているから、どうしても1対1で向かい合う状況になってしまう。

はじめは値踏みされているのかと思った。いや、演奏を評価しようと眼光鋭いお客さんはたまにいるけれど、彼のはまるで審査員として細かく点数でもつけているような。やけに真剣な顔で僕の手の動きを観察していたかと思うと、不意に苛ついた顔になり、かと思えば、いつの間にかそれはやけに悲しそうな表情に変わっていたり。そもそも、彼は本当に僕の演奏を聴いているのだろうか？

その頃には、彼の感情の起伏が自分とは無関係だということに薄々気づいてはいたけど、だからといってその変化を気にせずにはいられなかった。怒りから悲しみ、絶望、そして何かを決意したような力強い表情に。それからまたおもむろに溜め息を吐き、元の暗く力無い表情に戻る。

僭越ながら疲れた人達を癒すのが音楽家の仕事と自負しているものの、こういう展開は得意じゃない。余りに深刻な表情と一対一という状況のせいで、彼の感情が僕に伝染し、思わず暗いメロディを弾いて余計に雰囲気盛り下げそうになる。

やがて、彼は何度か腕の時計を気にした後、妙にさばさばとした顔で立ち上がると、幽霊の様な足取りで駅の方角へ去っていった。僕はやれやれとため息をつく。

気分転換に何か明るい曲でも弾こうか。

彼の姿が見えなくなった少し後、今度は彼が去ったのと反対の方角から、同じくらいの年代の女性が小走りにやって来た。

弾んだ息を整えながらきょろきょろと辺りを見回し、やがて彼と同じ場所に、彼と同じような思いつめた顔で腰かけた。疲れた様子だ。不意に視線が噛みあい、まじまじと見つめられる。

そこで何か話しかけられるという僕の予想は外れ、彼女はただ視線を落とすと、演奏する僕の手元に見入った。まるで、僕の演奏の中に探していた謎の答えがあるとでもいった表情で。

どうやら、今日は悩みを抱えた人々が集まる夜らしい。さて。だとしたらどんな曲を弾けば良いだろう。

そう考えたところで、何かがよぎった。

演奏を止め、勢いよく立ち上がる。

「彼！ほんの少し前に駅へ歩いて行ったばかりですよ！！」

左手でギターを抱え、右の手を伸ばして駅の方を指し示す。

怪訝な表情で彼女が僕を見つめ、気まずい沈黙が流れる。なんて見当外れなことをしてしまったんだろう？

だが、次の瞬間、彼女ははっとした顔で立ち上がると、ほんの少し希望の戻ったような表情で軽く頭を下げ（それが僕に対する会釈だったのか、決意を込めた頷きだったのか分からないけど）、駅に向かって走り出した。

僕は、場違いな笑顔でその背中を見送ると、楽器を構え直し、さっき思い浮かんだメロディを組み立て始めた。

千年タクシー

1999年の大みそかの出来事。

僕はその夜、その年最後のイベントを終えると楽器を携えたまま、十時過ぎの新幹線に乗って故郷に向かった。

夏は帰らなかったの、一年振りの帰省だった。

深夜、実家に向かうバスはもうなくて、タクシーで帰るには所持金が少々不足していそうだった。

「あの、この金額で行けるところまで行ってもらえますか？」

そう言って僕は、ギターケースを抱えたまま、タクシーに乗り込んだ。

車内は無言で、カーラジオから年末の特別番組が流れていた。

やがて、車載のデジタル時計の、緑色の数字が12時を回った。

僕は何か言うべきか少し迷った。

それは、運転手さんも同じだったかもしれない。

少しタイミングをずらして、ラジオの向こうでは盛大なカウントダウンが始まった。

世間はミレニアムとやらで、いつもより大袈裟な年越しを迎えているらしい。

年が明けた。

けれども、ラジオの向こうは少々度を越した、下品ともとれる盛り上がりようで、車内の空気とはあまりにも不似合いだった。

「止めちゃいますね」

運転手さんは小声でそう言うと、ラジオを切った。

しばしの静寂。

運転手さんは、僕が新幹線に乗って来た事を察したのだろう。

静かに、こう聞いてきた。

「途中、...山の方は雪降ってましたか？」

「...ええ、少し」

「こっちもね、二、三日前は積もってたんですよ」

それだけ言うと、車内はまた静かになった。

やがて、僕は料金メーターが所持金に近づいてきた事を切り出そうとした。

「じゃあ、止めちゃいますね」

運転手さんは、さっきと同じ口調で静かにそう言うと、メーターを切った。

車は目的地に到着した。

僕はシワだらけのお札と小銭を全部渡してタクシーを降りた。

路上演奏家のルール

音量と時間帯に注意

基本中の基本として、アンプなどの音量には注意しましょう。

そして、どうしても大きな音の出ってしまう楽器は場所や時間帯に配慮して下さい。

苦情がきてその場所で演奏できなくなれば、困るのはあなたとほかの演奏者たちです。

他の演奏者と適度な距離を保つ

相手に負けないようにと大声を張り上げてしまっは、演奏者にとっても通行人にとっても悲劇でしかありません。

どうしても場所がない場合、休憩時間をずらすなど、交替して演奏する事も良くあります。

「先にいた方が優先」というのが一般的ですが、それも考え方の一つにすぎないととらえておくべきです。

路上は誰のものでもないので、お互い譲り合い、融通を利かせて分かち合いましょう。

路上演奏家同士、挨拶して仲良くしておくに越したことはありません。何か困った時に助け合えるのも、路上の仲間たちです。

バスケットの紙幣はすぐに仕舞う

バスケットやギター・ケースの中に入れられたお札をそのままにしておく事は、自分からトラブルを招いているようなものです。

「ショバ代」は絶対に払ってはいけない

彼らにお金を渡すぐらいなら、さっさと退散するのが上策です。

将来の事を考えるなら、絶対に彼らと関わり合いを持ってはいけません。

ゴミは持ち帰る

自分の出したゴミは当然として、観客のだしたゴミ（空き缶や吸い殻など）も片付けるのが演奏者の仕事です。

あらぬ誤解を受けない為にも、自分の演奏していたサイト周辺のゴミは拾い集めるのが理想です。

通行を妨げない

通行人に遠回りをさせるような位置どりは、絶対に控えるべきです。
不必要に場所を占拠するようなギターケースやバスケットの置き方も考えものです。

酔っ払いの相手はしない

酔っぱらったり支離滅裂な会話をする人とは、正面から話し合っても深みにはまるだけです。
適当に受け流すか、早々に退散するコツをつかみましょう。

観客の誘導も演奏者の仕事

お客さんが大勢立ち止まったり、座り込んだりして通行を妨げるようになったら、邪魔にならない場所へ上手く誘導する事も演奏者の仕事です。
路上演奏自体が合法とはいえませんが、路上で集会を開くと立派な犯罪として検挙される事すらあります。

路上とは通過する場所

路上が通過する場所であるという事は、演奏が気に食わなければそのまま通り過ぎればよいという事です。
そのため、タクシーの待合場やオープン・カフェ、屋台など、聞き手が簡単には移動できない場所のすぐそばで演奏するのは止めましょう。

自分の身を守るのは自分

特に女性は、人通りの少ない時間になったら早めに撤収を考えてください。
昼間の治安と夜の治安は大きく変わります。

また、上記の様なルールに配慮し、自からトラブルを招かないようにしましょう。

We Comprehend By Awe

路上演奏をしていると（特に一人で演奏していると）、見ず知らずの人から唐突に身の上話を切り出される事が少なくない。

相手は老若男女様々だが、大抵はかなり酔っていて、ついさっきも飲み屋で同じ話をしてたんじゃないかっていう内容がほとんどだ。

彼らは、大抵こちらが演奏しているのをお構いなしに話しかけてくる。

それでいて、私は君の邪魔はしたくない、といった妙な優しさをみせる。こちらが演奏を止めようとする、続けるように促してくるのだ。

彼らにしてもただ話を聞いて貰いたいだけで、相手が返事を出来ない方が都合がいいのだろう（音量が小さいギター演奏家の辛いところだ）。

だからその日も、僕は演奏を続けていた。

+

50を過ぎたくらいの男性で、もう何日も飲み続けているかのように赤らんで、不精髭の伸びた顔をしていた。

彼は、コンビニのおでんを抱えてやってくると、いきなり僕の真横に座って話し始めた。

もうだいぶ遅い時間で、そろそろ切り上げようかと思っていた時だった。

「お兄さんいくつだい？いやあ、答えなくていいよ、演奏を続けてくれ。まあ、俺の息子よりはだいぶ若いかな」

僕は、軽く会釈だけして演奏を続けた。

「お兄さん、まだ結婚はしてないよな？俺の息子はこないだ結婚したんだよ。これがまた美人の嫁さんでさ」

彼は嬉しそうに話し始めた。

ははあ、自慢話ってわけか。

「...二人とも一人暮らししてたんだけどさ、結婚したら俺も一緒に暮らそうっていうんだよ。今時いないと思わないか？息子も立派だけど、本当に出来た嫁さんなんだ」

僕はそこで演奏を中断した（その時点で、もうずいぶん長く弾き続けていたのだ）。

今でもはっきり覚えている。

「それなら、こんなところで酔っ払ってないで、早く家に帰った方がいいんじゃないですか？」

僕はそう言おうとしたのだ。

言いとどまったのは、

「酔っ払いの相手をしてはいけない」

という路上演奏家の鉄則に従っただけのことだ。

けれども、その時そう口にしないで、本当に良かったと思う。

「それでさ、新婚旅行ってのに行っただけさ。お兄さんハワイって行ったことあるかい？」

僕はもう、次の演奏を始めていたので、黙ってただ首を横に振った。

彼はニッコリと頷くと、夢見るような調子で話し始めた。

「海がとっても綺麗なそうなんだよ。それで、息子と嫁さんは、なんて言ったけ？そう、スキューバダイビングってのをしたんだ。

それも、ただそこら辺を潜るんじゃないぜ、船に乗って沖の方まで行って潜るらしいんだ。それで、嵐が来てなあ。

危ないからってんで、息子たちが潜ってる間に、船の方は港に帰ってきちまったんだ」

そこで、彼は黙りこんだ。

演奏しながら、何となく聞いていた僕は、しばらくどういった話なのか理解出来なかった。

そして、理解した途端、頭をハンマーで殴られた様な衝撃を受けた。

手が震えるのが分かった。

彼は、俯いたまま動かなかった。

僕はただ、ここで演奏を止めちゃいけないという事だけを、自分に言い聞かせていた。

長い時間がたった。

しばらくして顔をあげた彼は、黙ってぼんやりと僕の演奏を見つめていた。

やがて彼は唐突に立ち上がると、鼻をすすりながら

「お兄さん、ありがとう」

と言った。

そして、冷めてしまったおでんを大事そうに抱え、「ありがとう」という言葉を繰り返しながら去っていった。

僕は、その背中を見つめていた。

僕は、彼の姿が見えなくなるまで、演奏を止められなかった。

路上カウントダウン

僕は知り合った音楽仲間から、「個性的」とか「変わった人」といわれることが少なくない。「変な人」と呼んでくれるのは主に良識のある方々で、単に「変人」と呼ばれる事も多い。

(ここから書くのはあくまで僕の個人的主観であって、誰かを非難する意図はない事を分かって欲しい。そして、こうして日記を書いている時の自分はとりわけ自意識過剰だという事は自覚しています)

で、僕なりに思ったのは、そんな時、僕の周りにはアマチュアであれプロであれ皆「ミュージシャン」なのだということ。

そんな「ミュージシャン」の中に普通の人間の僕が紛れ込めば、変な奴と思われて当然なのだろう。

僕が楽器を弾くのは、オモチャがあれば遊びたくなるからだし、曲を書くのは、白い紙があれば落書きしたくなるから、ライブするのは、お祭りがあるなら参加したいから、神輿があれば、観てるより担ぎたい、そして観てる人がいれば楽しませたい、という単純な理由からだ。

とはいえ、「ミュージシャン」以外の人の中でも僕は「変わり者」とか「変質者」(これはある官憲の誤解によるもの)扱いされる事が多い。

で、僕なりに思うのは、周りには「良識人」だったり「社会人」だったり「大人」だったりする訳だけど、僕はちょっとばかり進化して体毛が薄くなっただけの普通のホモ・サピエンスだから、そんな中に混じれば珍奇な目で見られて当然なのだろう。

そんなこんなで、今年のカウントダウン。

カウントダウンなんてオトシ二年参りをした事以外、特に意識してなかったけど、ミレニアムの時には「路上日記」に書いた印象深い出来事があったし、世紀跨ぎの時にはTV中継も入るデカイイベントに参加させてもらったりもした。

で、そんな事を思い出した時、何故か今年のカウントダウンは路上に立っていたいという思いが強くなった。

たとえ指板が凍りつこうと、酔っ払いに殴られようと、人通りが一切なかろうと、官憲にしょっぴかれようと、、、

勿論、どこかの売れっ子ミュージシャンの様な「路上が僕らの原点です」なんて気はサラサラ

ない。

僕は未だにそこでクラウチング・ポジションを取り続けているのかも知れないし、何ならずっとそこから離れたくないと思っていたりもする。

ただ、長い旅行から帰った後に旅行は旅行で楽しかったけど、「やっぱり我が家が一番だ」というあの感じ。

あの感じを味わいたくて僕は路上に立ちたいと思ったんだ。

問題はこの寒さ。

で、右手はクラーク工学に基づいて指抜きしたギター弾き専用内張り付き皮手袋、左手は靴下のつま先を切り取った特製リストバンドと電気工事の人が静電気防止のために使う薄手の布手袋で防御して演奏開始。

結果、右手は快調なもの、左手は軍手の様に左右兼様な為、指先に縫い目があるので隣り合う弦をミュートしてしまいやすく、コード弾きや単音弾きは可能でもベースとメロディを同時に弾くソロ・ギターには向いていない事が判明した。

手術用の薄手のゴム手袋なら弦のミュートは発生しないだろうけど、肝心の防寒効果は期待できなそう。

布手袋の上からゴム手袋をするという手も考えられるけど、そこまで行くと何故そこまでしてギターを弾かなければならないのかという根本的な疑問に立ち向かわなくてはならなくなる。

悩みは深まる一方なのです。

皆様、良いお年を！

作画はあだちみつる

さて、早いもので小正月です。

(地方により、正月中に忙しく働いた女性をねぎらう為の「女正月」と呼ぶ事もあるらしい)で、小正月といえば「どんと焼き」だけど、最近はプラスチック素材を使った正月飾りが多いので神社によっては中止したり、巫女さんが取り外す作業をしたりと対応に苦慮しているらしい。(ダイオキシンとか以前に、プラスチックの煙で焼いた餅やスルメは美味しくなさそうだ)

で、神社に行くと必ずしてしまうのが、絵馬鑑賞。ちょっと珍しい名前だとフルネームを書いてて大丈夫なのか?というのものもあるし、中には何を勘違いしたのか連絡先や住所をフルに書き込んでいる人もいる。

圧倒的に多いのは女性(と思われる名前)による恋愛祈願の絵馬。「何某クンと付き合えますように」というのが基本パターン。「〇〇君と目が合いたい」とやたら控えめなのや、「〇〇君に抱かれたい」とやたら大胆なのは、恋愛関係ではなく、おそらくアイドルとかのファンによるものだろう。

中には一枚の絵馬に、「〇〇君と付き合いたい。××君とも付き合いたい。△△君から告白されたい」と三つも願い事の書かれた、やたら欲張りなものもある。想像するに、全て上手く言ったら四角関係の修羅場になるのか、四者相愛のハーレム状態になるのか?そして、一方的に告白されたいだけの△△君の立場とは何なんだろう?

で、人間の欲深さにタメ息をつきながら見続けていくと、「S君が早く元気になりますように M」という他愛的な絵馬を発見。妙な胸騒ぎがしてその絵馬をめくってみると、同じ字で、「S君が早く退院出来ますように M」といったものが二枚。さらにその下には、「S君がレギュラーになれますように」というのがあった。

これだけ愛されている「S」とはどんな人物なのだろう?一番上の絵馬が「元気に」に変わっているという事は、とりあえず退院だけは出来たのだろうか?そして、「レギュラー」への道はどうなったのか?

胸騒ぎはまだ続く。探し続けると、あった。比較的新しい絵馬で、

「Mと幸せになれますように S」
この場合、同姓同名の別人の二人組、という選択肢はあり得ない。で、当然脳内では二人の青春の数ページがたちどころに展開されてしまう。

Sは野球部の万年補欠。Mはその部のマネージャーで、Sに気があるのだが本人の前では絶対にそんな素振りは見せない。Sにとっても紅一点のマネージャーのMは気にかかる存在だが、補欠の身では積極的なアプローチなど出来ず。居残りの帰り道で一緒になったりもするけど、好きさ余って喧嘩する事もしばしば。そんなある日、彼を不幸な事故が襲う。そして入院中の見舞いをきっかけに二人は急接近。

だけど退院した後はタイミングがつかめず、再び離れていく二人。
大会に向けて団結する他の部員達とマネージャー。
相変わらずの補欠で、怪我の為、さらに他の部員やMとの距離が離れてしまうS。
そんなある日、リハビリ練習の為に訪れたこの神社で、SはMの絵馬に気付く。
だが、すぐにMに思いを告げる事はしない。

境内での秘密の特訓。
そして奇跡の復活。
告白の舞台は勿論、甲子園だ。

そして、卒業。
二人は三年間の思い出を振り返りながらこの神社を訪れ、Sは絵馬を書く。

P.S.
さもあれ、これだけいろんな願い事をされる神様は大変だろう。
(もし本当にいるなら)年に一度の出番しかないサンタなどより大忙しに違いない。

ということで僕は、ご尊厳の御手を煩わせる事の無きよう、何も頼みごとはしないでおきました。

(タダ見して帰っただけ、という説もある)

Book end

彼らを見て、あのサイモンとガーファンクルの名曲"Old Friends"の歌詞を思い出した。

「古い友人が二人、公園のベンチに、まるでブックエンドの様に座っている」
もっとも、目の前にいるのは年老いた男女で、友人ではなく夫婦のようだ。

+

僕がいつもの公園で一人ギターを弾いていたら、彼らがやって来て通りを挟んだ向かい側のベンチに座った。

互いを支えるように寄り添ってやって来た、仲の良さそうな二人。だけど彼らは、歌詞に出てくる「旧友」同士の様に適度な間隔を置いてベンチに座ると、そのあと一言も会話を交わさなかった。

何も言わなくても分かり合える夫婦の絆。
二人はまるで、祈りを捧げるかのように目を閉じ、真っすぐに正面を向いて座っている。

その神聖な様子に感動をおぼえた僕は、彼らの邪魔にならないようにとギターのボリュームを少し落とした。

と、突然、旦那さんの方がギョロリと目を見開いて僕を睨んだ。
まだ、音が大きすぎるのだろうか？僕は気を使って、さらにギターのボリュームを落とす。
けれども彼は、さらに身を乗り出すようにしてこちらを睨んでくる。
僕は申し訳ない気持ちになった。
さっきからの演奏は、ちょっと慌ただしすぎて彼らの耳にはうるさかったのかも知れない。

僕は音量を落としつつ、曲調を穏やかに変化させ、この場の空気にあった演奏が出来ないものかと努力した。

しかし、旦那さんの方は相変わらず渋い表情でこちらを注視している。

僕はいたたまれなくなって演奏を止めた。

+

ギターをケースにしまって場所を移動しようとしていると、はたして向かいの彼らの方が先に立ちあがってしまった。

それも、去り際に静かな微笑みを浮かべてこちらに会釈を送ってくる。

僕は間の抜けた笑顔を返しながら、その時はじめて、二人がつたない僕の演奏を聴くためにベンチに腰かけたことに気付いた。

Deja entendu

今夜は訳あって、随分と長い距離を歩いた。

(時間にして四時間程)

みぞれ交じりの雨が、いっそ雪だったら良いのと思うほどコート of 布地に染み込んで凍て付き

、

こんな日に限って僕は(靴はブーツだったけど)、靴下が無かったのでうっかり路端の残雪などを蹴り上げたりすると飛び込んだ雪が足首を突き刺す。

(訳あってと書いたのは誤りで、本当はただひたすら歩きたかっただけかも知れない。使おうと思えばタクシーやバスはいくらでもあった訳だから)

ギターはソフトケースだから、少しでも濡れないように大きめなロングコートの内側にたくし込んで背負う。

(なので、傍から見ると背中が異様に膨らんだ奇妙な格好だ)

こんな時に限って信号はすぐ青になり、棒になった足を休ませてはくれない。

信号待ちの車列を横目に、その前に合った不条理な出来事を忘れようと、出来るだけ無心になろうと努めながら歩く。

と、強烈な既視感(いわゆるデジャ・ビュ)に襲われた。

何時の記憶なのか思い出そうとし、程なくしてそれが無理な事だと気付く。

暗闇に渋滞の赤いテールランプが並び、その上方には距離を置いて信号の赤い光が並ぶ。

そんなのは日本中のどこにでもありふれた風景で、それが東京にいた頃の記憶だったならなおさらだ。

しばらく歩き続けると、今度はある歌のメロディが耳にリフレインして離れなくなった。

それは僕が生まれて初めて作った「歌」。

(それまでも、インストの曲は沢山作ってたし、デタラメな歌詞でデタラメな歌は良く歌ってたけど、いわゆるポップス的アプローチで真面目に「歌作り」に取り組んだのは、それが最初だった)

で、一生懸命作った歌で、メロディは完璧に覚えているのに、歌詞の一節がどうしても思い出せない。

(曲自体はソロギター・アレンジもしたので、一人で何気なくギターを抱えてる時に良く弾きずさ

んでいた)

でも、明確に思い出せるのは、その歌を作った時のエピソード。

それは学生の頃、結婚した恩師の祝賀パーティーの為に二人の仲間と作った歌で、僕ら三人は結婚した二人を祝いたい気持ちは勿論強かったけど、それより何よりただ単純に何か「素敵なこと」がしてみたかっただけなのかも知れない。

三人が僕の狭いワンルーム・アパートに集まり、一人が主に作詞を担当し、僕が主に作曲で、もう一人はほとんど役に立たない突拍子も無いアイデアを次々と捻り出す役。
(三人目の役回りは単なる邪魔者とも言えたらうけど、そのお陰で安直な曲に仕上がらずに済んだのは偉大な功績だった)

それとなく聞き込みした二人の馴れ初めに、自分たちで創作したエピソードを勝手に付け加え、大まかな歌詞が仕上がった所で僕が作曲に入る。

で、二人があーだこーだと雑音を述べるので天井の高さが半分しかないロフトに避難してギターを爪弾き、

それでもウルサイので、家主なのにユニットバスに引き籠ってギターを爪弾き、

ある程度メロディが出来たら、酔って寝かかった作詞担当を振り起こして追加の詞を注文し、

三人目の繰り出すナンセンスなアイデアを受け流し、

寝不足のテンションで思わずそれを採用しないように注意しつつ、

なんだかんだで貫徹して曲を仕上げ、

パーティーの準備完了後の軽い昼寝で寝不足を誤魔化してから三人で披露したのが、最初で最後の演奏だった。

肝心の結婚した二人はとても喜んでくれたけど、それ以上にとっても照れて、緊張が解けた僕ら三人も恥ずかしさを誤魔化すため、その後は無闇にテンションをあげて盛り上がった。

と、そういった詳細は事細かに覚えているのに、歌詞の最後の一節がどうしても思い出せない。僕ら三人が共通して、一番伝えたかったメッセージがその部分だったはずなのに。

思い出とは所詮、そんなものなのだろうか？

忘れたくても忘れられない事は沢山あるのに、忘れたくなくても忘れてしまう事も沢山ある。

(だから、こんな日記を書いているのかもしれないけど)

そして僕は、今日の出来事をいつまで覚えているのだろうか？

長い一日

今日（と昨日）は色々な事があって、とても一日では書けそうにない。
(その日あった事を書くから日記と言うんだらうけど)

+

F氏と僕は彷徨っていた。

はじめは、沿線のある駅で夏祭があると聞いて、そこで演奏しようと思っただけで、会場は花火やら太鼓やらでとても僕らの演奏が聞こえそうにはなかった。

そこで、沿線の各駅を途中下車していったのだが、わりかしデリケートな僕らにとって、ここぞという演奏スポットはなかなか見つからない。

そして、辿り着いたのが終点池袋だった。

週末とあって、池袋ではすでに多くのストリート・ミュージシャン達が演奏していた。

+

空きスペースを探してさ迷っていた僕らは、哀愁を帯びた耳慣れない音色に弾き寄せられて足を止めた。

駅ビルの壁のくぼみにすっぽり収まるようにして、一人の中国人音楽家が胡弓を弾いていたのだ。

「やってみたいね」

F氏と僕は、どちらからともなくそう言った。やってみたいというのは、共演してみたいという意味だ。

共演といっても大げさなものじゃなくて、ただこの場で一緒に即興演奏してみたい、そう思ったのだ。

ただ、僕らはシャイだったし、お互いまだ稼ぎ時の時間帯だという理由で、しばらく演奏を聴き続けた後、その場は遠慮することにした。

+

駅前の噴水公園に足を向けると、今度は聴き慣れないウネリのある、弦楽器の低い響きが聞こえてきた。

弾いているのは僕らと同じ年位の青年で、弾いている楽器は「琵琶」らしい。

話してみると、彼は近所の音楽大学の学生で作曲科に通っているそうだ。路上演奏はした事ない

けど、琵琶の発表会が近いので公園の片隅で練習していたという。

僕らは彼にも共演を申し出てみたが、丁重に断られた。恥ずかしがってるらしい。

なんだか今日は、変わった弦楽器奏者が集まる夜らしかった。

僕らの放浪はまだ続いた。

というわけで、(眠いので)続く

路上のパーティ

僕らがようやく空きスペースを見つけてしばらく演奏していると、さっきの胡弓弾きのおじさんがやって来た。

彼の方も、僕らが立ち止まって熱心に聴きこんでいたのに気付いていたようだ。

彼は胡弓教室も開いている在日中国人だが、たまに路上演奏をして収入の足しにしているという。

さて、音楽家同士、言葉での会話はいらぬ。ヤンさんは（という名前だった）僕らの隣に折りたたみ椅子を置くと、さっそく胡弓を取り出した。

短くお互いの演奏を聴かせあった後、早速、共演開始となった。

始めはヤンさんの演奏に僕らが合わせるよと提案したものの、ヤンさんは僕らに先に弾けという。どうやら胡弓という楽器の性質上、調性などを合わせにくいというのが理由らしい。

+

僕らが古いジャズ風の演奏を始めると、ヤンさんは哀愁を帯びた（しかし近くで聞くとかなり迫力のある）音色で絡んできた。

最初は探り探りだったが、次第に熱を帯びた独自の旋律を奏で始める。

音量自体で負けている僕らも、必死でヤンさんの演奏についていった。

すると、どこからともなく怪しげな低音の唸りが聞こえてきた。

見れば、さっきの音大生がやって来て琵琶のチューニングを始めているではないか。

彼は遠慮がちに、

「僕も混じっていいですか？」

と言った。

断る理由なんてない。

正直、琵琶の音色は余りにもうねっていて、音があっているのかさえさっぱり分からなかった。それでも今、何か得体の知れない音世界が生まれている事だけはハッキリと分かった。

気付けば、僕らの周りには異常なほどの人だかりが出来ていた。

この怪しげな音色と、異色の楽器編成に興味を惹かれて集まったのだろう。

ヤンさんの自由奔放な胡弓の旋律と、終始不気味なうねり音を発する低音の琵琶。

実際に音楽の指揮をとっているのは僕とF氏の二本のギターなのだが、主役は完全にこの民族楽器

の二人だ。

どうやら終電が終わり、駅に残された人々がこぞってやって来たらしい。

いったん人だかりが出来ると、それが膨らむのは早い。実際に演奏が聞こえなくとも、何をやっているのだろうと興味を引いて、人だかりが人だかりを呼んでしまうからだ。

でも、人壁の向こう側が見えなくなるくらいびっしりと人が集まるのは、ただの路上演奏では初めての経験だった。

いつの間にか、いつかの玄さんもやって来て、あの怪しげな踊りを踊っていた。

それにつられてストリートファッションに身を包んだ少年達も、ステップを踏み始める。

他の観客は手拍子だ。

こうなってはもうギターなど弾いてられない（ギターの音量なんてすぐにかき消されてしまう）。F氏はギターのボディを叩いて必死にリズムをとっている。

ヤンさんと音大青年も、この異常な事態に戸惑いつつ、酔っ払いに囃したてられてどんどんヒートアップしていった。

とはいえ、僕らは盛り上がりを維持しつつ、そろそろ潮止めにしなければやばいなとも思い始めていた。

騒ぎが大きくなりすぎて、警察の厄介になるのは御免だ。

だけど始まりも終わりも決まっていない演奏だから、どう終わらせていいか分からない。

視界の隅に近づいてくる警官が見えたのをきっかけに、僕は覚悟を決めて歌い始めた。

曲は「上を向いて歩こう」だ（他に上手い終わらせ方は思いつかなかった。それにさっきヤンさんがこの曲を演奏していたのを思い出したからだ）。

F氏もすぐに僕の意図を察してハモリを歌い始め、ヤンさんと音大青年も同じメロディを演奏し始めた。

酔っ払った観客も一緒になって歌い始める。

一番の歌詞を二回繰り返した所で、僕らは目配せして曲を終わらせた。

お客さんの盛大な拍手が僕らを包んで、一応の大団円となった。あたりを見渡すと、やって来た警官も肩をすくませて拍手していた。

終電を逃してしまったり、かなり酔っ払ってテンションの上がっているお客さん達はアンコールを要求してきたけど、僕らの考えは一致していた。

四人は立ちあがると、まるで長い間演奏を共にしてきた楽団みたいにタイミングを揃えて深々とお辞儀した。

警官も端から人ごみを崩しにかかった。

+

僕らが片付けをしていると、さっきのお客さん達の（その場で知り合ったらしい）グループが、缶ビールやらコンビニのおにぎりやらを差し入れに持ってやって来た。

なんだか、このままここで酒盛りが始まってしまいそうな勢いだ。

けれども、僕らは早いところこの慌ただしさから逃れたかったので、ヤンさんや音大青年（結局、彼の名前は分からなかった）とのお別れもそこそこに、ギターケースを抱えてその場を抜け出した。

人気のない陸橋までやって来た僕らは、奇妙な夢から覚めたような気分ではばらくボーっとしていた。

（おびただしい数の線路を見下ろす、なぜか荘厳な感じのするその場所が僕らは好きだった）

僕らは（ちゃっかりポケットに入れてきた）缶ビールを飲んでようやく一息つく事が出来た。そして、いいようのない孤独を感じた。

僕らは彷徨っていた。

だから僕らはその場所で、朝日が昇るまでギターを弾いていることにしたんだ。

世の光

僕は東京の朝が好きだ。

それも、朝日が昇りはじめ、始発が動き出すまでのごく僅かな時間が。

一日の始まり。

夜の間にスモッグが追い払われた空に、朝日が薔薇色の燭指を伸ばす。

この空も、すぐにまたくすみ始めるのだろう。

+

僕は終電を逃して夜通しギターを弾き続けた後、駅前ロータリーの中央へと向かった。

信じられるかい？

人気のないロータリーの真ん中でギターを弾くと、広大な駅前広場全体がコンサートホールになるんだ。

こんな頼りない六本の弦なのに、遠く離れたビルの壁面からも反響が聞こえてくる。

遠くからこちらを見ている、カラオケ帰りの若者がいる。

普段なら10メートルも離れば人ごみにかき消されてしまう僕らのギターだけど、今はあんな所まで聞こえているらしい。

気がつくと、人だかりが出来ていた。

カラオケ帰りの若者や仕事を終えた飲み屋の店員さん、夜間工事の作業員の人たち…。最初にだれかが立ち止まり、他の人たちもそれにつられて集まってしまったのだろう。

こんな早朝に路上演奏をしている人間はいないから物珍しかったのかもしれない。みれば、同じく終電を逃して24時間のファーストフードに避難していた弾き語りミュージシャン達もいた。

誰かが手拍子を始めて全員に伝染し、突然のパーティータイムが始まる。

けど、それもほんの束の間の出来事だった。

朝一番のトラックが走り始め、始発に乗った人々が駅からやってくる。

すぐに僕らの演奏はかき消された。

気付けば、観客はいなくなっていた。

僕らは、追い出されるように家路につく。

流れに逆らって駅へと向かい、人々が降りた後の人気の無い下り列車に乗った。

最後の夜

その日、今にも泣き出しそうな空だった。

僕は、もしもに備えて丈の長いロングコートを着て路上に出かけた。

(傘は差さないけど、雨が降った時にギターに被せる為だ)

ハッキリとしない天気の為か、人通りはまばらで、立ち止まって演奏を聴く人もいなかった。

こんな日もあるかなと、その日は早めに演奏を切り上げた。

結局、雨は降らなかった。

その日を最後に、僕は路上演奏を止めた。

路上の人々

終わりに、

路上は普段なら、ただ通り過ぎるための場所だ。
けれどそこでは、様々な出会いがあった。

彼らの事は、忘れないでいたいと思う。

彼の名前が、本当にトミーなのかどうか僕は知らない。（それは彼が集金箱にしているレザーケースに貼ってあるステッカーに書いてあった名前だ。もしかしたら、何の意味もなくそういう柄のステッカーを貼っていただけかもしれない）

彼とは何度も顔を合わせた事があるし、一緒にパフォーマンスをした事もある。しかし僕は、彼と会話した事がない。

なぜなら彼はパントマイマー、それも「マネキン芸」と呼ばれる静止したまま微動だにせず、一言も発さない芸を持ちネタとしているからだ。

彼の「芸」は本当に見事なもので、通行客がいくら話しかけたりちょっかいを出しても反応したのを見たことはない。

彼は、いつも僕が到着する前から芸を始めており、僕が帰るまで芸を続けている。その姿を見ていると苦行というか、何かの修行の一環としてそんな事をしているような気にもなってくる。だけど、それならばピエロの扮装は必要ない。やはり、彼も芸として演じているのだろう。

もしかしたら彼は極度のシャイなのかもしれない。

本当にそんなに長時間静止していられるのだろうか？と、疑問に思う人もいるだろう。確かに休息は必要だ。

しかし、彼の場合は徹底していた。

数十分立ち続けると、彼は突然、操り人形の糸が切れたようにその場に沈み込む。その状態でもやはり静止し続ける。

そして、しばらく経つとゴム人形に空気を入れていく様に少しずつ立ち上がり、元のポーズに戻るのだ。

+

その日、トミーに挨拶して通り過ぎる時（勿論、返事はないけれどそうするのが習慣になっていた）、レザーケースの中を覗きこむと、やはり入っている小銭はまばらだった。僕は彼から離れた所に陣取って演奏を開始したが、こちらも客の入りはまばらだ。

しばらくやってみて僕はふと思いつくと、場所を移動してトミーの元に向かった。

「ここでやってもいいかな？」

僕がそう聞くと、彼はやはり何の反応も示さなかったけど、ほんの少し口元を歪めて微笑んだように見えた（気がした）。

それを了解と受け取った僕は、彼の足もとに椅子を置いて演奏を始めた。

始めはピエロのトミーに合わせた陽気な曲を弾いていたけど、途中から哀愁のある曲に変更した。

むしろその方がピエロに相応しいかもと思ったからだ。

+

終わってみると、結果は期待通りだった。

哀愁のギターと孤高のマネキン・パントマイヤーの組み合わせが良かったのか、お客さんの反応は上々。チップをくれる割合もいつもより多かった。

僕のギターケースの方がチップが多く入っていたので（それは入れ物の大きさによる違いだろう）、適当に半分を見つろって彼のスーツケースに入れた。

別れ際、僕があいさつすると、彼はほんの少し口の端を歪めて微笑んだ（ように見えた）。

彼はその後もそこに立ち続けていた。

+ +

ちなみに池袋には、トミーに良く似た芸人（？）がいた。

その彼は、スキンヘッドに全裸（ブリーフのみ）で、全身を真白に塗りたくってポーズをとっている。

しかし、彼の場合、静止しているのではなく、ごくごくユックリと（本当にゆっくりと）動いているのである。

その為、しばらく時間をおいて彼を見ると微妙にポーズや立ち位置が変化しているのだ。

そして彼の場合、芸ではなく芸術としてパフォーマンスしているので集金箱は置いていない。なのでチップもあげる必要はない（と思う）。

管楽器奏者の場合

路上には様々なジャンルの音楽を奏でる人々がいるが、僕らと同じジャズや即興演奏をやっている演奏家となると管楽器奏者がほとんどだ。

さて、路上で知り合ったミュージシャン同士、即興で共演する事も少なくない訳だが、この管楽器奏者との共演というのは、ある大きな問題を抱える事になる。

それは、管楽器とギターとの音量の違いだ。

一度、路上で知り合ったサクソ奏者と演奏した時には、その音量でギターの音色などすっかりかき消され、悲惨な結果になった。お客さんにはギターの音色なんて聞こえず、ただサクソスの為のメトロノーム代りにチャカチャカとコードをかき鳴らすだけだった。

+

その点、トランペッターの彼の場合は違っていた。

彼は、まるでチャップリンみたいなツバ広帽とよたよたのスーツ(ただし色はカラフル)を着ていて、ミュージシャンというより、コメディアンという言葉がピッタリくるような風貌の年配の紳士だ。

彼はいつも、その年齢からは想像出来ないダイナミックな振り付きでご機嫌なスウィングを演奏し、通行人を沸かせていたのだ。

(彼は早い時間から演奏しているので、僕らとはいつも入れ違いになっていた)

+

ある日、帰り際の彼は僕らに気付くと、立ち止まってケースからトランペットを取り出した。

「スローで頼むよ」

そう言うと、彼は出だしのフレーズを吹き、僕らに入ってくるように促した。それは、僕らが路上でいつも演奏している有名な古いジャズ曲だった。

僕らは心打たれた。

トランペットは本来大きな音で演奏する楽器で、その時の彼のように（ミュートも使わずに）生ギターに合わせた小さな音で演奏するのは高度な技術を要するはずだ。そして何より、いつもの「職人芸」然とした演奏とうって変わり、その音色は本当に涙が出そうになるほど美しかった。

。

それは（曲そのものは明るい曲なんだけど）、音量を落として吹いているせいでとても切ない、すすり泣くような音色だった。

彼がスローで、と言った理由が分かった。それは力強いけれども儂ない、哀愁を感じさせる旋律だった。

去り際、僕らが感動しながら別れの挨拶を述べると、彼は振り返ってツバ広帽をくるりと外し、夕日に照らされたハゲ頭をペチリと叩いて会釈した。

僕らは、彼こそが本物のエンターティナーだと思った。

Show must go on

彼はいつも高架下のトンネルでヴァイオリンを弾いていた。

彼は細身の長身で、いつもオーケストラの楽団員みたいな黒いスーツを着ていた。

彼の特徴は、常に横を向いて演奏しており（それはヴァイオリンの形状によるのだろうが）、決して通行客の方を振り向かない事だ。誰とも眼を合わせずに演奏し、観客がチップを入れる時も何も反応しない。

僕は路上演奏する時、出来るだけ前を向くように心がけている。けれども、彼の場合もまた、一つのプロ意識の表れの様に見える。

古本屋の主人が元気良く挨拶しないのと同じで、聴いている観客に余計なプレッシャーを与えない為の配慮なのだ。

+

ある日、僕が彼の演奏を聴いていると、一人の酔っ払いが彼に絡んできた。

始めは野次を飛ばしているだけだったが、そのうち彼の肩に掴みかかり始めた。

これはまずいな、と思った。

路上演奏家の鉄則として酔っ払いは無視し続けるしかないけど、体に掴みかかられたり楽器に触れられてしまっただけでは演奏を中断するしかない。

ヴァイオリニストの彼も、酔っ払いを制止するか、諦めて場所を移動するのではと思った。

しかし、彼はそのどちらもしなかった。

酔っ払いを避けるように身をよじりながら、アクロバティックな態勢でヴァイオリンを演奏し続けたのだ。

はじめその行動は、僕には不可解としか思えなかった。

そして、気付いた。

彼が演奏を止めないのは、僕がここにいるからだ。たった一人でも観客がいる間は、演奏を止めまいとしているのではないだろうか。

僕はその姿に、あのタイタニック号が沈む間も演奏を続けたという楽団員にも通じる誇り高さを見た気がした。

酔っ払いは、なおもしつこく彼に絡む。。

（そろそろ止めに入らないと）

と僕が行動を起こしかけた時、酔っ払いは急にその場にへたり込んだ。相当に酔っていたから、限界に達して力が抜けてしまったのだろう。

僕が手を貸すと、酔っばりは向かいの壁を背にして座り込んだ。

うつむいたその姿は寝ているようにも見えたけど、その頭はヴァイオリンのリズムに合わせてゆっくりと揺れていた。

そして、ヴァイオリンの音色は、何事も無かったかのように響き続けていた。

その時、少し不安な気持ちがよぎった。

彼が誰にも反応しないのはもしかしたら...

僕は彼のヴァイオリンケースにチップを入れ、会釈して別れの挨拶を告げた。

彼は大きく頷いたけど、それが挨拶なのかヴァイオリンを弾く動作の一部なのかは分らなかった

。

R

殴られ屋。

「殴られ屋」というのはお客さんにボクシング用のグローブをはめて貰って、3分千円とかで一方向的に殴られるという商売。

はじめ見た時はただのケンカかと思った。

最初はボクシングのステップを使ってよけたり防御したりするけど、そればかりではお客さんが不満なので相手を見て適度に殴られる、その兼ね合いが難しいらしい。

休憩中に話しかけたら、なんだか哲学的な事を言ってたけど良く意味は分からなかった。

T

孤高のシンガーソングライター。路上の、というよりは深夜ファミレスの仲間といった方が良いかもしれない。

僕が深夜のファミレスに五線譜を持って曲を書きに行くと、彼の方も使い古したノートを持って詞を書いていたりして、軽く挨拶を交わして別々の席に着く。

そしてお互いに煮詰まってくると、どちらかが席を移動してきて朝まで他愛のない話を繰り広げる、といった関係。

なんでもないような日々だけど、とても幸せな時間を過ごしていたのだと今は思う。

夜中にドリンクバー単品を注文しても、朝になってモーニングセットを注文すればセットメニューに含まれているから無料になるという事を教えてくれたのも彼だ。

音楽に関して、理論や知識的なことは僕が「先生」となって教えることが多かったけど、こと音楽そのものに関しては僕が彼の姿勢から学ぶことが多かった。

Keep the good vibes!

種田さん

いわゆる「火吹き芸」を生活の糧としている方。

通常、火吹き芸というと瓶から口に含んだアルコールを松明などに吹き付けて行うけれど、彼の場合、MC(?)のご挨拶をしたかと思うと（燃料を含む準備動作なしに）手に持った松明からいきなり火を噴きます。

何故そんな事が可能なのか？

タネは事前に白灯油を胃袋まで飲み込んでおき、人間ポンプ(よく飲み込んだ金魚とかを生きたまま吐き出す芸をするアレです)の要領で逆流させ口内に蓄積するというもの。

しかる後、数回ずつ分けながら噴き出していたのです。

胃の腑から灯油を逆流させる時の苦しげな彼の顔は、まさにその瞬間、彼の人生そのものを表現した漢(おとこ)の顔でした。

そんな彼は激しい芸の結果、喉や消化器系を激しく痛めて声を出すのもやっとの状況となり、やがて路上から姿を消しました。思えば彼の場合、芸の最中にも官憲にショッ引かれる事がしばしばでした。

それなのに何故、彼が「火吹き」にこだわったのか？

「今生きているうちにやらにゃあ、あかん」

それは、文字通り彼の命をかけた「芸」であったのです。

(早いご回復を心よりお祈りします)

(追記：謹んでご遺徳を偲ばせて頂きます)

T

詩人。書家？

良くいる無意味に前向きな言葉を、下手ウマな筆文字で色紙に書いて売りつけている男。

会って話す分には嫌な人間では無いのだが、彼はあの連中にいわゆるショバ代というものを払っており、自分の仕事場所で先に演奏しているミュージシャンがいるとそれを盾に追い払っている事がしばしばあった。

だから僕は彼が大嫌いだ。

どんな偉そうなキレイ事を書いてても、彼がやってるのは自分さえよければ良いという最低の行為だ。

ヘル

弾き語りフォークシンガー。

彼がなぜヘル(地獄)だなんて物騒な名前かということ、その顔(というか髪形)をみれば答えが分かる。

彼はものすごいアフロで、そんじょそこらのアフロならせいぜい「タワシ」とか「鳥の巣」とかくらいしかあだ名されないけど、彼のアフロは一本一本の毛が不規則に密に絡み合い、その上ところどころプロミネンスの如く外側に長く飛び出し、またあるところではコロナの如くチリ毛が爆発しており、その混沌とした有様は正に「ヘル」としか呼びようがないのだ。

そんなヘルだけど、性格はとってもピースフルな男、そしてベビーフェイスだ。

MM

最近池袋でもとんと珍しくなったらしい、いわゆる物乞いタイプのホームレス。

(以前は、軍服を着て松葉杖をついた「エセ傷病兵」というのがほんの数年前までいたらしい)

路上で立ち止まってる横に来て話しかけてきて、僕らの様な路上演奏家にまで声をかけてくる。

家族が事故に会って田舎に帰らなきゃいけないとか、自分自身が重病で手術の為に金がいるとか、その時々によって話す内容は違うらしい(僕が聞かされたのは娘が援交して病気になったという話だった)。

で、さんざん長々と不幸話をした挙句に「百円頂戴」とか言ってくる。

(だからといって払う気があるわけじゃないけど) 今の話を聞かされてそれで百円でどうなるの？というのが正直な感想。

それとも、今のペースで長話をして一人一人から百円ずつ貰っているのだとしたら、それで電車代や手術代を稼ぎ出すまでに一体何日かかるのだろうか？

或いは、

真に迫った語りっぷりへの木戸銭としての「百円」ならば、払っても良いかもしれない。

K

二人組でジプシースウィングを弾いたり、クラシックギターで一人でソロ演奏してたりするギター一弾き。

偏屈で、路上演奏家のクセに人見知りで、皮肉屋でケチで大らかで頑固で天の邪鬼で不器用で、ちょっとだけ涙もろい。

終わり

最後に登場して貰うのは、いわゆる「ストリート・ミュージシャン」の仲間たち。
僕のような、半分趣味で半分チップ目当てな演奏家と違って、路上を「ステージ」として演奏する人々だ。

僕らが路上の脇役として演奏しているとするならば、彼らは「主役」となる事で演奏している。

彼らとは沢山の交流もあったし、色んな話もしたし、素敵な仲間も大勢出来たけど、今まで紹介しなかったのは、「路上演奏家」より余りに数が多くて紹介しきれなかったから。

(それだけに、良く出会ってるのに顔と名前が一致しない仲間も多い)

だから、ここで紹介するのは「路上」から旅立った人々。

いわゆる、彼等にとっての次のステップへ進んだ仲間達だ。

(僕らは路上が出発点で終着駅だけ)

H氏

彼は、尖がり頭の金髪で、エレキ・ベースで弾き語りをするという一風珍しいミュージシャン。
初めて出会った時、彼はまだそんなに有名じゃなくて、連れの友人は彼の事を知らなかったけど、たまに深夜のバラエティ番組を観ていた僕は彼がお笑い芸人だという事を知っていた。

彼はまだ無名とはいえ既にいっぴしの芸能人で僕らよりも年上だというのに、とても腰が低く謙虚で、演奏場所を決める際も近すぎて音が邪魔になっていないかとか気遣ってくれた。とても礼儀正しい青年だった。

(年上だけど、「路上」に関しては彼の方が後輩だったというせいもあるかもしれない)

+ +

そんな彼だけど、いつの頃からか池袋の飲み屋街の入口とか、歌舞伎町のだ真ん中とか、そんな場所で演奏を強行しているのを見かけるようになった。

ある程度の繁華街は注目を浴びれて都合も良いけど、歌舞伎町の中心部などは酔っ払いに絡まれたり警官もいたり、それより怖い人種もいたり、普通のストリート・ミュージシャンなら避けて通る場所だ。

で、その理由を聞こうと近づくと、演奏の合間、彼は仕切りに何ヶ月後かに発売されるという予

定の自分のCDの宣伝をしていた。

発売はまだ随分と先な様だし、当時はお笑い芸人が芸人としてCDを出すなんて珍しかったから、僕らは半信半疑だった。

半年後、彼のCDは発売され、異例の大ヒットを記録した。

P.S.

その後、彼に続くようにCDや着うたを販売するお笑い芸人が増えたけど、彼ほどの成功を収めた人は少なかった。

当然の結果だと思う。

現在は芸人として活動する傍ら、声優をしたり、CMにもたびたび出演し、番組のジングルやテーマ曲を作るなど純粋に作曲家としての活動も行っているのだそう。

ケンちゃん

話したことも会った事も無いけど、僕らと同じ池袋のトンネルで路上演奏していた「先輩」だと、例の玄さんから何度も聞かされた男性シンガー。

僕らに「黒い瞳」だとか、年配者も良く知っている歌声喫茶的な曲をもっと演奏するようにアドバイスしてきたのが玄さんだけど、その時に聞いた話。

「ケンちゃん」も初めはこの場所で英語のR&Bばかり歌っていて通行人の食いつきが悪く、ほとんど無視されている状態だったけど、玄さんが「良い声なんだから、皆が知ってるような童謡を歌ってみたら良い」とアドバイスしたところ、徐々に立ち止まる人が増え、噂を呼んでデビューに至ったのだそう。

はじめは誰の話が聞かされているのか分からなかったけど、その時にケンちゃんが選んだ曲がああ「大きな古時計」だったとか。

Aさん

彼女は夜の路上において目立って若く(幼い、と言ってもいいかもしれない)、MCでお客さんと話し込んだりする「ストリート・ミュージシャン」的なタイプではなく、「音楽家」然とした雰囲気だった。

だから正直、路上で何度か見かけても話した事は無かった。

+

彼女と初めて会話したのは、ある大きな大晦日のカウントダウン・イベントの時。

(僕らはオープニング・アクト、というかいわゆる前座で、彼女も場繋ぎ的な扱いの配置転換時のパフォーマンス。

メイン・アクトはTVで見かける芸能人やモデル、クラブで有名なDJ達だった)

楽屋は同じ一つの大部屋で、彼女は早くから待機していたのだけど、その時もプロフェッショナルな真剣さを漂わせていて、話をする雰囲気じゃなかった。

(何より、彼女のそばには厳めしそうなおじさんが付き添っていて、はじめは「保護者」かと思ったのだけど、様子を見てるとどうやら「マネージャー」であるらしかった)

つまりは距離を感じていたってわけ。

だけど、僕らが出演を終えて戻り、そのおじさんが打ち合わせか何かで楽屋を去った時、彼女の方から興奮した様子で話しかけてきた。

ステージの雰囲気はどうだったかとか、お客さんの様子はとか、緊張しませんでしたかとか、緊張していて思わず早口でまくし立ててしまうといった雰囲気。

その顔は、彼女の年齢からしたらごく自然な表情だった。

で、既に出番を終えた僕らは彼女の緊張がほぐれるように、くだらない雑談をして笑わせたりして、

それからオジサンが戻って来て出番が近い事を告げると、彼女は再び真剣な、他を寄せ付けない顔立ちに戻った。

+

それからしばらくして、彼女は芸名(というかプロジェクト名)を用いて、顔すらも隠してデビューした。

その歌は有名なTV番組の主題歌として随分と耳馴染んでいたのだけど、それが彼女の曲だと知ったのは、彼女が顔を明かして芸名(本名の漢字を変えただけのものに)を変えたのを、ニュースで知

った時だった。

+

Kくん

彼と初めて会ったのは、僕が東上線クルーだった頃のとあるローカル駅のロータリー。彼はアスファルトの路上にバッテリー内蔵のキーボードを置いてあぐらをかき、片手で鍵盤を叩いて伴奏、片手でトランペットを操りメロディという特異なスタイルで演奏していた。

ハーモニカを吹きながらギターを弾いて足で打楽器を鳴らすとか、
サクスを吹きながら足でベースを弾くとか、
サクス二本とクラリネットの計三本を同時に吹くとか、
背中にドラムを背負いシルクハットにシンバルを乗せて膝に結んだ紐で操作するとか、
挙げればキリが無いほど色んなスタイルのワンマン・バンド(一人で沢山の楽器を演奏する音楽家)を見たことがあるけど、彼のスタイルは初めて。
で、演奏しているのは流行りのJポップとかで、腕はしっかりしたもの。
珍しいから立ち止まるお客さんも多いのだけど、話術の方は苦手らしい。

その後、都内のあちこちでも彼と出会うようになって話を聞いたけど、彼としては路上をステージとしての訳でも、チップを稼ぎたい訳でも無くて、本格的なミュージシャンとしてのデビューを目指しており、今は様々な表現活動を模索中。
「キーボード&トランペット」はその一つに過ぎないのだとか。

+

最近になって、TVの深夜番組で「キーボード芸人」というキャッチ・コピーで登場する彼を見た。
もうトランペットは持っていなかったけど、キーボードで色んな曲を組み合わせたりゲーム音楽を再現したりと、やってることは「音楽」と言い切るより「芸」と呼ぶのがふさわしい。

聴いてみると、彼はユニットを組んでデビューしたり、その後、曲作りに専念したりと模索した結果、「芸人」という道に辿り着いたようだ。
彼には是非とも頑張ってもらいたい。
相変わらず、話術は苦手な様だったけど。

P.S.

その後のビッグ・ニュースとして、彼が某有名ゲームのテーマ曲作者に選ばれたというのを人づてに聞いた。

そして、今は世界に羽ばたくため、海外で再び路上演奏を行っているとのこと。

路上から出て再び路上に戻ってくる人の中に彼の様な成功者は少ないけど、新しい場所でまた路上から始めるというのが彼らしいやり方だと嬉しく思った。

追記

あるギター弾きの、深夜ファミレスでの記録と走り書き、

あるいは、語りうるもの全てを書き出すことによって、
語りえぬものの輪郭を示す試み。

「芸術に進化や退化といったものはない。ただそこにあるだけだ」

「音楽は、楽器から音が放たれた時点では、まだ完成していない。演奏者や聴衆の耳に入り、解釈された時点で存在し始める」

「何かを表現しようとする時、そこに表現されるものが存在するのではない。ただ、表現しようとする行為のみが存在する」

「即興演奏。それは、世界でもっとも古く、もっとも新しい音楽」

「即興演奏。精神世界の連続性における、ケイオティック領域の彼方への遙かなる旅路」

「囚人はカモメの夢を見ていた。
その時、看守は囚人の夢を見ていた」

何よりも聞こえてくる音に注意を払い、
これから出そうとする音に神経を集中させる。
そして音楽そのものに常に誠実で居続けられるように
努力しなくてはならない。
人生もまた同じ事だ。

演奏中に互いの音を聴きあう事が重要なように、
曲の終わりも、聞くことによって完成させなければいけない。
それは、最後の音符の後にあり、次の演奏までの間にある「休符」を、
演奏者全員が「聴く」ということ。

「芸術はそれ自身目的ではない。
人間性を表現する為の手段である」

ムソルグスキー

「芸術が人生を模倣するよりも遥かに多く、
人生が芸術を模倣する」

ワイルド

「芸術とは、人間が心の中に高まる感情を、最高最善のものへと移行させる人間活動である」

トルストイ

「芸術とは、自然が人間に映ったものであり、
肝心な事は、鏡を磨く事です」

ロダン

「芸術家はまず何よりも人間である。
ゆえに彼は、彼の時代の愛情、憎悪、情熱、信仰、そして偏見を、それを認めるにせよ、排せるにせよ、これを彼の作品に反映させる事が出来る 一神聖な芸術が、彼にとって常に目的であって手段で無い限りにおいて」

ゴーチエ

「芸術家の天職は、
人心の奥深くに光を送り込むことである」

シューマン

「芸術家は人生を愛し、その美しさを我々に見せてくれなければならぬ。世に芸術家というものがいなかったら、我々は人生の美しさを到底本当には知らないであろう」

アナトール・フランス

「人生は短く、芸術は長し」

ヒポクラテス

「芸術は人生と同じく、深く入り込めば入り込むほど広くなるものである」

「建築家は無数の部屋を作るが、いつもその部屋部屋から追い出されなければならない」
ゲーテ

「芸術のための芸術」

クーザン

「芸術は生命理解の器である」

ディルタイ

「芸術は私である。

科学は我々である」

クロード・ベルナール

「偉大な芸術家は、模倣せずに盗む」

パブロ・ピカソ

「明瞭さとは、明暗の適切な配置である」

ハーマン

「芸術に従って芸術を作ってはならぬ」

ジャン・コクトー

「芸術家とは、才能があって、

いつでも初心者のつもりでいる人間の事だ」

ルナール

「美意識は規律性の最後の精妙な仕上げとなるであろう」

マカレンコ

「芸術とは、

人間の中に再創造せられたる全宇宙である」

エミール・アントワーヌ・ブールデル

「明瞭さとは、明暗の適切な配置である」

ハーマン

「美は均衡に何か奇妙なところが無ければ存在しえない」

ベーコン

「芸術に進化や退化といったものはない。ただそこにあるだけだ」

「美は真を判断する」

アラン

「全ての芸術は、音楽の状態を志向している」

ウォルター・ベイター

「音楽は無意識に数学するものである」

ショーペンハウエル

「音楽は形容詞を表現するが、名詞は表現しない」

ハンスリック

「音楽は宇宙の観念を与える。

全ての芸術は多少なりともそうである。

芸術は調和であり、調和とは宇宙の翻訳なのだから」

ボードレール

「音楽は流れる建築であり、建築は凍れる音楽である」

シュレーゲル

「音楽について最も讃嘆すべきは、微妙きわまる人間の聴感と靈魂だ」

グールモン

「おお、音楽よ。人生のあらゆる声が木霊する神秘の洞窟よ」

アンリ・ド・レニエ

「音楽は人類の持つ普遍的な言である」

ロングフェロー

「地獄は素人音楽家で満員だ」

バーナード・ショー

「その背後に思想無くして、真の音楽は無い」

ショパン

「音楽は猛々しい胸を和めて、岩をやわらげ、節ある樫の木をも曲げる魅力を持っている」

ウィリアム・コングリーヴ

「甘美な音楽を聴きつつ、我を詩に臨ませよ」

ミラボー 『臨終の言』より

「音楽は、楽器から音が放たれた時点では、まだ完成していない。演奏者や聴衆の耳に入り、解釈された時点で存在し始める」

「音楽について、最も讃嘆すべきは、美妙極まる人間の聴官と霊魂である」

グールモン

「何かを表現しようとする時、そこに表現されるものが存在するのではない。ただ、表現しようとする行為のみが存在する」

「自分の人生の中に取り入れなくちゃならない、
真実を発見するのを手助けしてくれるのが音楽なのよ」

アラニス・モリセット

「母国語は僕の第二言語だ、音楽こそが僕の、
そして人類共通の第一言語なのです」

(チェロとは)「私は「人間の声の中で、一番、“祈り”の声に近い音」と表現したいのです」

ミーシャ・マイスキー

「現実の世界は辛く、悲しい出来事も多いが、
音楽は一時的にでも、
そこからより高い世界へ連れてゆけるものだと信じている」

ソニー・ロリンズ

「音楽とは美しい庭園だ。
そして、自分はその中の一つの植物なのだ」

あるピアニスト

「今、生きているうちにやらなければならない」

あるブルーズマン

「「たった一つの音」を聞くために、私は音楽を続けている。
40年の音楽生活の中で私は三回だけ、その音を聞いたことがあるんだ」

あるギタリスト

「コンサートでは観客を喜ばせる為に演奏する。
そこに悲しんでいる人がいれば、その心を慰める為に演奏する。
そして、こんな曇り空の日は、世界が美しいと信じる為にアコーディオンを弾くんだ」

あるアコーディオン弾き

「音楽は何かを表現しているようで、実際は何も表現していない」

ストラヴィンスキー

「求めたのはありのままの姿、
音楽には常に誠実で無くてはならない」

「音楽は、作られるのではなく産み出される」

「全ての音楽は死に向かって流れる」

「どんな直感でも発展でも、自分がいる周りの状況によって抑制も限定もされずに伸ばす事が出来る。それこそが自由だ」

エヴァン・パーカー

「自分で創造して自分の感情に責任を持ち、そして自分の音楽を創る。芸術における最初の基本法則は"自分自身になる"ということ」

チック・コリア

「機会の探究」

「計画と意思という形で音楽を構造化することへの拒絶と、
極めて慎重にあやうく保持された直感の美への依拠」 ピーター・ライリー

「書記の道具であることから解放された詩」

マラルメ

「固まっていない、
力動的で同時並行的、一示唆的で刑事的な現実性から生まれた稲妻の様な直観」

マリネッティ

「即興は形式を、確立を売買しない」

「即興演奏。それは、世界でもっとも古く、もっとも新しい音楽」

「即興演奏。精神世界の連続性における、ケイオティック領域の彼方への遙かなる旅路」

「『自由でありたい』とは『自由であろう』とする自らの精神で自分を束縛すること。
真の自由を得るには、ただ『自分は自由だ』と思えば良い」

「何よりも聞こえてくる音に注意を払い、
これから出そうとする音に神経を集中させる。
そして音楽そのものに常に誠実で居続けられるように
努力しなくてはならない。
人生もまた同じ事だ。」

「演奏中に互いの音を聴きあう事が重要なように、
曲の終わりも、聞くことによって完成させなければいけない。
それは、最後の音符の後にあり、次の演奏までの間にある「休符」を、
演奏者全員が「聴く」ということ」

「私は骨董屋よりもむしろ廃物屋、或いはゴミ捨て場といったものを好む。
何故なら、骨董屋にあるのは既に発見され、価値を見出されたものばかりだからだ。
すぐれた芸術家はゴミ捨て場から優れた骨董品を発掘し、価値を付与する。
だが、それは利益を保持しようとする骨董屋のやり口に過ぎない。
そして、困難だが別の方法もある。
それは、あらゆる選別の為の価値判断、美的基準というものを放棄する事だ。
それは、自らの中の「発見された」という意識を捨て去ることに他ならない。
そして、音楽の未知なる領域はその先に拡がっているのだ」

「太陽も明けの明星の一つにすぎない」
H.D.ソロー

「天国への扉は、ためらいなく叩く者にのみ開かれる」

「敵がシーっと非難するのをやめたら、こちらは落ちめだってことね」

マリア・カラス

「望みを持とう。でも、望みは多すぎてもいけない。多くのことをなす近道は、一度に一つのことだけをすることさ」

モーツァルト

「批評家がなんと言おうと気にしないことさ。これまで批評家の銅像が建てられたことがあったかい」

ジャン・シベリウス

「人にはできないことというものがある」

「自分の持って生まれた性質と戦いたくはないんだ」

ビル・エヴァンス

「素晴らしい音楽を創造するためには、クソみたいなレコードを山ほど聴かなきゃならないんだよ」

「俺たちがロックの王様だって？王なんていないさ、ロックの世界は民主主義なんだ」

ミック・ジャガー

「いったん金にだめにされたら、友達は得られない」

ボブ・マーリー

「すべて偉大なものは単純である」

フルトヴェングラー

「重要な問題は、全てこの世で解決しなきゃならないと思う。死んでから、どこだかよくわからない場所で解決するんじゃなくね」

ビリー・ジョエル

「君が音楽家になりたいと思った時、君は音楽家なのだ」

レーナード・バーンスタイン

「世界ってのは、その玄関先から広がってるものさ」

ジミ・ヘンドリクス

「孤独や社会からの疎外感に悩んでいる人に、そう感じているのはあなた一人ではない、あなたは決して間違っていないと伝えることが私の務めなのです」

マリリン・マンソン

路上の人々に捧ぐ

路上には様々な出会いがあった。

人々は様々な目的で路上で演じる。

食べていくために演じる路上音楽家、自分達の音楽を知ってもらいたくて唄うストリート・ミュージシャンたち、そして愛や平和を訴える名もない路上の詩人たち、、、。ただ彼らは皆、同じ一つのメッセージを発しているように僕には思える。

+

路上には芸人や音楽家の他にも、さまざまな芸術家がいる。彼らを芸術家と呼ぶ事に異論がある人もいるだろうが、深夜の路上でコンクリートにスプレー缶を吹きつけるグラフィティ・ライター達もその一員だろう。彼らは自分たちのことをグラフィティ・ライター（書き手）と呼ぶ。決してペインターやドロワー（描き手）とは呼ばない。

何故なら、全てのグラフィティはタグ（小さな走り書きの署名）から始まったからだ。だから、それがどんなに大きなミュラル（壁画）に発展しようと、常にそれは「俺はここにいるぞ」というライターのメッセージなんだ。

+

路上演奏家も同じだと僕には思える。

音楽が人間の第一言語であり、
新生児の第一声が言葉によらない精一杯の叫びであるように、
彼らの音楽は、
「自分はここにいる。そして貴方達と今、こうして繋がっている」
というメッセージなのだ。
それは、人間として生まれてきたもの全ての、根源的な欲求だ。

最後に友人の詩人（彼がなぜ詩人と呼ばれているのかは、本人がそう名乗っているという以外の理由を僕は知らないけど）の言葉を借りて、彼らにエールと感謝を捧げたいと思う。

流行りの歌はやがて廃れるかもしれないが、路上に響く名もなき人々の叫びは絶える事は無い

。

何故ならば、彼らの唄はアスファルトを這い、コンクリートの狭間に潜り込み、地の隙間に沁み込んで生き残り続けるからだ。

路上日記

<http://p.booklog.jp/book/53665>

著者：加賀ヒロツグ aka clark0226

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/clark0226/profile>
ウェブサイト <http://www.geocities.jp/barmithruxe/music/index.html>

ウェブログ <http://geocities.yahoo.co.jp/gl/barmithruxe>

Twitter <https://twitter.com#!/clark0226>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53665>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53665>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

